

No.8

歴史の都市から明日の都市へ
—都市と大都市政策の視点—

1999年1月

名古屋市立大学経済学部
附属経済研究所客員研究員
吉井 信雄

歴史の都市から明日の都市へ

～都市と大都市政策の視点～

名古屋市立大学経済学部経済
研究所客員研究員

吉井 信雄

(名古屋市総務局企画部長)

はじめに

ことわっておくが、筆者は考古学や西洋史の専門家でもなければ都市社会学者や建築家でもない。長年にわたり名古屋市という大都市の政策プランナーとして政策の立案にたずさわってきた者である。名古屋という大都市に生まれ、育ち、そして今も働き、生活をしている。都市の中で暮らし、都市を常に対象としながら、時には都市のまなざしを感じつつ、現実の様々な都市問題に日々直面する中で、都市とは何なのか、一時も頭をはなれたことがない。現実の政策をプランニングしようとする程、対象としての都市は一体何で、どの様にしてできてきたのか、その本質は何なのか、常に考え続けて今日に至った。

筆者が都市を研究する際の視点は、今日の都市問題をいかに解決し、この街の将来展望を切り開くか、そのための政策を具体的に提示するために、過去の歴史から何を学び、どのような教訓を引き出せるか、そういった視点である。従って、通常のそれぞれの専門分野における定説とは少し異なったり、いささか強引な推論もあるかもしれないが、あくまで、都市政策立案上の観点からであるということをはじめにことわっておく。

全体は2部構成となっている。第1部では都市とは何か～その本質と起源を、①古代都市、②中世都市、③バロック都市、④近代都市、の四つに分け、都市の本質とは何かを論じる。そして、一部で導き出された視点に立脚しつつ、第2部では大都市政策を立案する場合の重要な視点について基本的な考え方を論じるとともに具体的な政策を提示する。

第2部は、①市民社会と市民意識、②定住と交流、③大都市のリノベーション（建設の時代から運営の時代へ）、④都市の個性と魅力づくり（都市アイデンティティの形成）、⑤地方分権と広域行政（自立・参加・連携）、の五つについて論じる予定である。

第1部 都市とは何か ～その本質と起源～

都市とは何かを議論する場合、都市の形成の歴史をたどりながら都市の本質を議論するのが一般的である。ここでは、政策プランナーとして実際に都市政策を立案する場合、参考になる視点を引き出すという観点から都市とは何かについて考えてみたい。

都市形成の歴史を次の概ね、四つの時期に分類し、議論を進めたい。

即ち、(1)古代の都市、(2)中世の都市、(3)バロックの都市、(4)産業革命以降の近代の都市

(1) 古代の都市

都市に関して一般的にみられる定義は、「都市とは大きな集落であり、一つのまとまった居住地である。」(マックス・ウェーバー「都市」)、あるいは「都市とは人為的につくられた集団的な生活の場である。」(増田四郎「ヨーロッパの都市と生活」)といったもので、都市とは自然にできたものではなく、人為的につくられ、多くの人々が生活をすまるとまりのある場であるということである。

私達が都市とは何かを考えようとするとき、通常は、都市の対概念である農村とか田舎を頭にイメージしながら都市の意味を探ろうとする。そうすると、人口の大きさというものが両者を区別する決定的なポイントになる。

例えば、我が国で現在都市化の率を計る場合、D I D (Densely Inhabited District) (1ヘクタール40人以上の人口密度を持った地域が隣接して5000人以上の人口を有する地区)の概念を使用するが、この考えのもとには人口である。奥井復太郎は、「都市の精神」の中で、集落人口の密度が都市としかざるものを決定すると述べている。また、ハワード・サールマンは、都市の失敗を示す指標としては人口の減少が唯一あるだけである、と述べている。

しかし、人口が多いだけで都市かというだけでは必要な条件ではあっても十分ではない。ウェーバー自身も人口要件の外に、大多数が農業でなく工業または商業から生じた収入で生計をたてているということを都市の条件としている。一方、都市計画あるいは建築を専攻する人達の中には「目にみえる形」に着目して都市を定義する人達が多くみられる。つまり、都市というものは文明そのものであり、建築であるとする考え方である。従って、都市が誕生するには城壁と建築の存在が不可欠ということになる。

この考えに依れば、小高い山の頂きに柵などで囲んだ「高城」(川添登「都市と文明」)というものが都市の萌芽であり、高城の成長発展のプロセスから都市が誕生してく

るということになる。

少し詳細にその過程をおえば次の様になる。

最初は恐らく、ルイス・マンフォードが述べる様に、都市は固定した住居の場となるより先に人々が定期的に戻ってくる集まりの場として始まったのであろう。彼は、「容器より先に磁力があった」と述べているが、歴史を通じて、容器の機能が磁力の機能よりはるかに重視されてきたことも事実である。いずれにせよ、なんらかの人々の集まりの場というものがあり、そこは、地形的には交通の便（水運）がよく、土地が肥沃な川の近辺の高台にあり、人々はそこに集落を形成していったと考えられる。

そして、外敵から財産や生命を守るために柵で集落を取り囲んだ。これが「高城」と呼ばれるものだが、集落が大きくなると、いちいち川に降りて水を汲むのも大変な労力と時間を必要とするため低地に居を移し、これまでの「高城」をいざという場合の「逃げ城」にしていった。やがて、農業生産力が上昇し、余剰生産物が蓄積できるようになると王権が誕生し、立派な神殿を建設することが可能になる。そうなる低地全体を外敵から守るために城壁で囲み、王城や公共的施設も下町に移すということが行われる。この段階が都市であると考えられる。

典型的な事例としては、ギリシャ アテネのアクロポリスがあげられる。（写真1）

はじめは、山の上のアクロポリスに神殿はじめすべての施設があったが、それが下町に降りてきて、アゴラという下市が形成され、多くの市民の活動の中心となった。そして、アクロポリスは神殿とともに余剰生産物や財宝を保管する倉庫を中心とした神域として認識されるようになった。このようにアクロポリスの機能、役割は「高城」から始まり次第に変容をとげてきた。しかし、アテネが滅亡する時、市



アテネのアクロポリス。聖なる岩と呼ばれていたが紀元前16世紀末にアクロ（上）ポリス（市）と呼ばれるようになった。海拔156m

民の多くがアクロポリスに立て籠もり、そこで最後をとげたということからも理解できるように、最終的には「逃げ城」としての機能をまっとうしたといえるのではないだろうか。

ここで注目すべきは「高城」という物理的な防御のための囲郭と並んで「神殿」という概念である。都市の起源を論じる場合、多くの論者が重視するのは宗教との関係である。

フェステル・ド・クーランジュは代表作「古代都市」の中で次の様に述べている。

「都市は同じ守護神を持ち、同じ祭壇にむかって、宗教的儀式を行う人々の集団であった。」クーランジュによると、家族とはかまのかたわらに在るもので、同じかま神に祈り、

同じ祖先に神せんを捧げることを宗教から許された人々の一団であるという。その家族が、他の家族と神を共有することで連帯し、支族をなし、それが部族に発展し、その部族の連合が都市を形成する。例えば、ギリシャの各ポリスには聖なる火の燃え続ける「共同のかまど」があったと言われている。（家族から都市への発展という点については論理の飛躍がみられるという批判もある。）こういったいわゆる「宗教起源説」の流れにそった考え方は数多い。

例えば、マンフォードは、「初期の都市の特徴は、すべて人間が創造せられた目的は、創造主なる神を賛美し、神に仕えることであるという信仰を具現している。これこそ、都市が存在するための究極的な理由である。」（ルイス・マンフォード「都市の文化」）、と述べている。ルードヴィヒ・ヒルベルザイマーも「都市の本質」の中で同様のことを言っている。彼によれば、古代における都市の発展過程は、一般的にまず祭司を中心とする村落が砦を構えて都市が成立し、次第に成長する。やがて繁栄の絶頂期に達し、さらに巨大化する。そして、社会的矛盾が激化し、はじめて専制的な支配を余儀なくされ軍事都市へ変化し、やがて滅びるという図式をたどるとしている。

こういった宗教に起源をもつ都市論の中でも、梅棹、川添両氏は明快に「都市は神殿として存在した。」と述べ、神殿・宮殿などの公共建築が登場することによって初めて都市となったとし、市街地の形成がみられなくても、神殿が現われればすでに都市が存在したとみなしうると断言している。しかも、ギリシャのポリスのように神殿とポリスは一体であったケースが多い。彼等の主張は、神殿の存在は一つの共同体を越えた広い地域にわたる普遍的な価値を規定するもので、それを操作する情報センターとしての都市が成立したことを示すとみるもので、この議論の核心は、物の交換より、秩序を形成するものとしての情報こそが都市の本質であると考えたものである。

当然、こういった情報が広範囲に共有され、秩序が形成されるためには、都市機能の専門分化と協業が必要となり、都市の建設・管理それぞれの分野における専門家集団の登場が不可欠と考えられる。考古学者のV・ゴードン・チャイルドはこういったフルタイムの専門家集団を中心とした社会機関の発生に着目して都市の誕生を考えた。（ゴードン・チャイルド「歴史のあけぼの」）

確かに、古代都市にみられる神殿の建設は共同作業であり、何千人もの労働の段取りを決め指図を出すことが必要であった。そのためには、すべての段取りが計算されていなければならない、そのための専門技術者が必要とされた。ちなみに、最初の技術者は鍛冶屋と大工だといわれる。また、ある程度の度量衡の統一も必要になったり、時間管理も必要と

なるというように神殿の建設にはかなりの社会の組織化が不可欠の前提であった。

神殿の登場あるいはそれらを支える社会機関の発生ということを考えると、都市の起源はけっこう過去に遡る。

一般にシュメール時代のウルが都市の (urban) 起源だと言われているが、考古学の成果によると、歴史上都市の萌芽は紀元前6000～7000年頃にみられ、はっきり都市としての形態が現われるのは紀元前3000年頃のメソポタミアではないかと言われている。

紀元前5000年末にはすでに神殿を持つ集落をもっており、紀元前4000年にはメソポタミア地方に、文明の創始者といわれるシュメール人が定着したと言われている。

紀元前3000年紀前半にはシュメール地方にウルク、ウル、ラガシュ、ウンマなど軍事的都市国家が栄えたと言われ、ウルなどは城壁を持ち、人口34000人、周辺を含めれば24万人を超える人口をようし、学校もあり、文字を教えていたといわれる。

世界最初の都市といわれるのは、ユーフラテス川のほとりのウルクという都市で、ここでは福祉施設、織物工場の跡さえ発見されているといわれている。紀元前3000年に至るまでの約1000年の間に文字の発明をはじめとする様々な実り豊かな発明・発見が行われ、その結果、社会の経済的再編成が可能になったが、ゴードン・チャイルドはそれを「都市革命」とよんでいる。(この点については、マンフォードなどによれば、都市規模を考える場合、重要なのは集団的伝達組織の範囲で、メソポタミアなど初期の都市では市民を呼び集めるための手段が集会の太鼓であったことと、劇場で一人の演説家が話しうる最大の人数から判断して、恐らく5000人あるいはそれ以上であったであろうとしている。この5000人という数は、プラトンの5040人に依拠したと思われる。また、ヒッポダモスは1万人を都市に見合う人口とみていた。紀元前3000年という大昔にどの様にしてこれ程の都市が誕生したかは今後の各方面の研究にまたねばならないと思われる。)

以上、古代都市を中心に都市の起源を探ることから都市とは何かを考えてきた。古代においては奴隷制に依存していたため、交易はみられても、ものを生産して取引をするという意味での活発な商品流通はみられなかった。真の意味で商人が都市の勝利者になるのは、アンリ・ルフェーブルも指摘するように、中世末期の西欧においてのみであった。

都市にとっての「商人」の意味と「市民」の概念については、古代都市からは引き出せないため、中世都市の項で議論することにしたい。(なお、ギリシャのポリスに「市民」という概念があるが、この場合の市民とは農村土地所有者であり、特権階級であった。別

名「戦士ツンフト」ともいわれ、ここで言う市民とはいささか異なる概念である。)

その意味では、古代都市の研究は、都市の起源を考える場合には重要であるが、現代都市を考える場合には、あくまで現代と断絶した過去であることに留意する必要がある。そうはいっても、古代都市から私達が学ぶべき大切な視点がいくつかある。それは、ひとつは「囲い地」という概念であり、今ひとつは情報センターの核としての「神殿」ということである。まず、第一の「囲い地」という点について述べてみたい。この点で一番理解しやすいのは、城壁に囲まれた中世都市だが、これは次の項で取り上げることとし、ここでは一般論として考えてみたい。

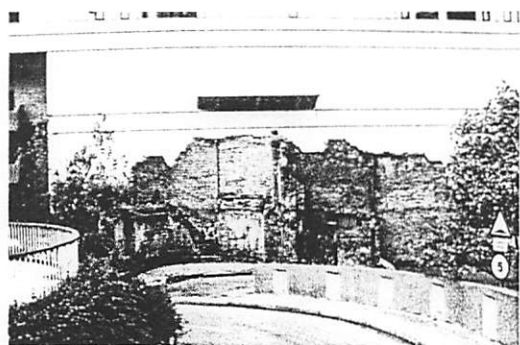
人間は本能的に「囲い」を作りたがる。これは、敵と味方を区別し、身の安全をはかるということからくる人間の自己保存本能と言ってもいい。従って、人類が最初に築いた建築物は防塁なのである。最初は外敵から物理的に財産や生命を守るために防塁を設け囲うが、その結果どうなったかと言うと、囲いの内部と外部とで決定的な差異が生じてくる。

つまり、内部にいる人々は基本的に味方であり、外部は敵であるという差異である。このことにより内部の結束は意識的に、より強固なものになり、共同して外部の敵に対処しようとする気運が生じてくる。囲うことによって内的求心力が付き、そこから身内意識が生じ、運命共同体としての共同社会意識が発生する。このことが中世都市における市民と市民社会の成立を可能にするわけだが、それはさておき、このことから推察すると、都市というものは、経済的動機より先に政治的、軍事的動機により成立したと言えるのではないだろうか。

我が国においては、四方を海に囲まれ、自然の障壁としての海が城壁の役割を果たしたことや、内陸部の地形も山地が多く、移動が困難であったことから、米山俊直が言う「小盆地宇宙」の形成をみるが、「囲い」という観念が稀薄であった。このことは日本と同様の条件下にあるイギリスにおいても同様で、イギリスでは城壁を設けるという考えには消極的であった様に思われる。(写真2)この様に都市の形成は、その国のおかれている風土の影響を強く受けている。

このことから、都市の原点は、人間が住むという居住性は当然のこととして、外敵から身を守るための「囲い地」、そのことによる安全性の確保にある

と言えるのではないだろうか。また同時に「囲い」を作るということは、囲い、守るべき



ロンドンのバービカン地区内に残る古代ローマ時代の市壁の一部。ほんの一部分しか残っていない。

ものがその中にあるということの意味し、そのことが皮肉にも略奪の対象として狙われやすいということにもなる。その結果、より強力な防壁を築き、対抗力として軍事力を持たねばならなくなり、こうして都市はまず軍事都市として成立することになる。

今ひとつ重要な点は「神殿」という概念である。現代に生きる私達にはなかなか理解し難いと思うが、古代人の宗教観では、自然現象は神によって引き起こされると考えられており、神に対する畏怖の念とともに創造主たる神を賛美し、仕える信仰を具現化するために神座（やがて 神殿）が作られた。従って、古代では王権が登場する以前に権力をもっていたのは神の祭事をつかさどる神官であった。神殿は単に神を祭る施設であるだけでなく、収獲物を貯蔵したり、資本蓄積の場としての大銀行であったり、時には城塞としての役割を果たしたりする、言わば「複雑な機能を持った複合体」であり、都市そのものであった。

前述のごとく、高城－逃げ城－下町という都市発展のプロセスを見ても分かるように、そういった複雑な機能を持った複合施設が拡大発展するにつれ、純粋な神殿機能が山頂に残ることになる。この神殿は現代流に言えばまさに、政治的、軍事的、宗教的、経済的、文化的機能を束ねた情報センターということで、その意味では、都市の原点は、前に指摘した居住性、安全性に情報機能を付加したものと言ってもいいだろう。

このような都市が成立するには農業革命が前提となる。それはまず、灌漑設備が整備されることから始まる。この灌漑設備の整備という点は重要で、灌漑用水路を掘り、かつそれを維持していくことは、当時としては最大規模のプロジェクトであった。シュメールにおいては、水量が一定しないユーフラテス川の水を大規模な灌漑によって平準化する必要性からそのための社会組織が生まれたといわれる。（ジェフリー&スーザン・ジェリコー「景観の世界」）

この社会組織こそゴードン・チャイルドが言う社会機関と同じ意味で都市はこのようにしてできてきた。こうして水をコントロールすることが可能になると農業生産物は飛躍的に伸び、穀物の大量栽培が可能になり、余剰生産物が増大し、富の蓄積が促進される。そうすると、その富をいかに分配するかが大きな課題となってくる。富を配分するという行為は、マンフォードが指摘するように、暴力と並んで人々の尊敬と恐怖を獲得する最も原始的な方法のひとつである。巨大な神殿を建造したり、軍事力を駆使して戦争をするには、そういった行為を統制する者が必要となり、長い期間かかり自然にリーダーが選ばれ王が誕生する。最初は儀式的な「穀物王」が誕生し、それが武将をかねたりしながら「神格王」となっていく、とチャイルドは指摘している。いずれにせよ、王の誕生には相当の期

間がかかり、シュメールでも何百年もかかったと言われる。そして、王の再配分の組織として政府というものが登場してくる。このようにして形成された都市は、その後歴史の大部分を通じて「組織的暴力の容器」となっていくのである。

(注) ここでは古典古代都市も便宜上古代都市として扱った。

(2) 中世の都市

「古代は死んだが中世は生きている。」(鈴木成高「中世の町～風景～」)と言われるように(といってもアルプス以北)、中世ヨーロッパの都市は現代にも脈々と息づいている。

その意味でも、都市論の研究者の間で中世都市に魅了される研究者は多い。例えば、マンフォードが師と仰ぐ、パトリック・ゲデスは「進化する都市」の中で、第9章をドイツ都市計画の旅という章にあてて、次の様に述べている。「独の偉大な近代的産業や商業の中心地区の心臓部において、決して死滅しておらず、再び新たな生命力が脈動している中世のあの偉大な自由都市の伝統的精神があるからである。このことはもし、我々がそれぞれの都市を進歩させようとするならば全てのその国の人々は一度ならず何度も独を訪ねさせざるを得ないということであり、また、そうすることによって都市の成長を元気づけ指導し得るといふことなのである。」(下線は筆者による)

ゲデスは自分達のまわりの具体的な地理的世界についての観察力を持つことの大切さを説き、常に都市を旅し、その都市の中から、都市の持つ地域特性、地方生活、市民精神といったものを嗅ぎ取り、その上に立ってプランニングはすべきであり、決して上からされるものではないという強い信念をもっていた。様々な中世都市のなかでも、特に独の都市を高く評価し、独の国家としての強さは陸海軍にあるのではなく、都市や市民にあると述べているほどである。

私見によれば、これまでの各都市論は大胆に分類すれば概ね二つの派に分けることができる。そのメルクマールは一口で言えば、「都市とは芸術か否か」という点にある。ルイス・マンフォード、パトリック・ゲデス、カミロ・ジッテに代表される論者は、都市は芸術作品であるとする派に属すると考えられる。(例えば、「美しくないものは都市と呼ぶに値しない。美しい都市精神というものを持った都市だけが都市と呼ぶに値する。」「都市計画においてこそ、芸術が最重要の役割を十分果たすものであることを反省してみるべきである。」(カミロ・ジッテ)、「都市は芸術を育てると共に芸術である。」(マンフ

オード)

一方、都市は芸術ではないとする派ではジェーン・ジェイコブス女史の名前がすぐ浮かぶが、むしろル・コルビジエに代表させる方が適当であろう。この論争はつまるところ、歴史の評価をどう見るかということに関わる。歴史に重きをおく人達を歴史派とあえて呼ぶなら歴史派が一様に評価するのはエベネザー・ハワードの田園都市であり、しかもハワードが理想としたのが中世都市であることから、歴史派が一様に都市の理念型として頭に描いていたのはヨーロッパ中世都市と考えていいだろう。このハワードの田園都市を少し小ぶりにして実現したのがロンドン近郊のハムステッド・ガーデンサバーブであり、ここにおいて建築家アンウィンはハワードの理念である「中世都市におけるピクチュアレスクな街並み、形態の不規則性など」を設計技法に取り入れ、中世の街並みを実現しているが、ゲデスはこのアンウィンに感謝の辞を捧げている。(写真3)

一方、ジェイコブス女史はマンフォードなどの歴史派を「中世帰り」と厳しく批判しており、このことから論点は中世都市の評価に関わると言えよう。この議論は単刀直入に整理すると「曲線対直線」議論と言い換えることができる。人間の意思の強さを無上のものとして高く評価するコルビジエは、近代の直線道路を「人間の道」と呼ぶ一方、曲がりくねった中世都市の道を「ロバの道」と呼び、直線を主体とした幾何学を曲線より優位においた。こういったコルビジエに対し、マンフォードは「現代都市の展望」の中でコルビジエを批判して、次の様な名言をはいている。



アンウィンが設計したロンドン近郊の田園郊外ハムステッド。今世紀のイギリスでコミュニティスケールの都市計画としては最も優れていると言われる。(ロンドン都心から北へ約8km, 340 ha, 5570戸 16000人居住)

「彼が無視し去ったのは都市の重要な役割、即ち、変化のただなかにあっても豊かで多様な文化を持った過去との眼にみえる構造上のつながりを維持することによって未来を豊かにしていくという役割であった。」(下線は筆者による。)

コルビジエの考え方については後ほど述べるとして、いずれにせよ、ヨーロッパ中世都市こそが近代都市の原点であり、それを評価するにせよ批判するにせよ、中世都市の考察こそが、都市論を議論する場合の出発点であると思う。

以上の観点から中世ヨーロッパにおける都市の成立について詳しく述べてみたい。

中世ヨーロッパ、特にゲルマンにおいては、森が深く、その森を切り拓いて集落をつく

っていったため、（別添図1参照）ゲルマンには古代都市にみられた「高城」は存在しなかった。従って、ギリシャやローマにみられる様な都市は成立せず、集落を囲った民衆ブルグと呼ばれるものと、領主を中心とした城砦（支配者ブルグ）があったにすぎなかった。

都市の成立ということを考えると、一般的な集落が拡張したものではなく、そこには何らかの核としての権力的存在が必要で、それが中世都市の場合は封建領主であったと考えられる。（例えば、ニュールンベルクはその名が示すとおり、岩山の城塞を中心に成立した都市を意味する。）

都市が次々と誕生してくるのは、12世紀以降（ドイツでは10世紀、11世紀に都市の萌芽がみられ、12世紀にかなり増加し、13世紀にピークを迎える。そして15世紀には約3000の都市が存在したと言われる。）で、ノルマン人の侵略により防御壁が侵略の防御として効果のあることが分かり、（例えば、ドナルド・マシューの「中世のヨーロッパ」によると「886年～888年にパリを包囲したバイキングを退けたのは市壁であった。」とある。）防御壁を設けることが一般化するとともに、防御壁を建設する能力を持つ領主のところに安全を求め、人々が集まり商売をするようになった。

一方、この11世紀～13世紀頃にかけてヨーロッパでは三圃式農業の導入などにより農業生産力が飛躍的に上昇し、人口が増加するという、いわゆる「大開墾時代」を迎え、森林が相当農地に転用されていった。「人口1000人の都市でもこれを支えるには中等地で最小25km²の三圃式農地が必要とされる。」（佐々木博「ヨーロッパの文化景観」）といわれ、古代都市において農業革命を前提として都市が誕生したのと同様、中世においても農業生産力の飛躍的な増強によって、農村から都市への食糧と人口の供給が可能になり、中世都市の隆盛期を迎えることが可能となった。その意味では、中世までの都市は常に農村と強い相互依存関係を保持していたと言えよう。

この農村から都市へ人口と食糧を供給し、中世都市が隆盛になったという点については、ジェイコブス女史は「都市の原理」の中で、農業優位のドグマと切り捨て、それは過去にすぎりつくダーウィン以前の思想史の名残りであると主張している。彼女によれば初めに都市ありきで、そして農村が発展したという。先史時代でも農業と動物の飼育は都市で始まったとしているが、ここでは、これまでの通説に従っておく。

中世においては、最盛期には3000ほどの都市が盛えたと言われるが規模は小さく、90%ほどが1000人以下の人口で、1万人を越える大都市は15しかなく、ケルンの3万人が最大で2番目がリューベックと言われている。中世都市がこの様に規模が小さい理由は、給水と食糧供給に限度があったことと、輸送と交通の制限によると考えられる。

当時は輸送が大問題で、重い物、大きな物は水路に依存せざるを得なかった。従って、水運に便利な川の近くのやや高台に都市の多くは立地し、（現在でもヨーロッパの100万都市26の内、77%にあたる20までが河川沿いに立地している。）囲壁を持つ領主の館の周辺に市場が開設される例が多くみられた。

領主が司教であるかないかで都市の形態に多少の差が生じるが、いずれにせよフランク王国が成立し、9世紀にヨーロッパという概念が成立して以降（同時に王が皇帝となった。）地方の経営は、皇帝自らが行うか、教会関係者（大司教か司教）あるいは貴族（封建領主）に委託して行うかどちらかであった。

ヨーロッパの都市というものは、極めてイメージしやすく、都市地図でみると、中心の広場から外へ向かって円形にいくつもの環状道路がちょうど樹の年輪の様に配置されている。そして、一番外側の環状道路（あるいは公園）がほとんどの場合、18世紀あるいは19世紀に取り壊された城壁の跡で、一番内側が最初の城壁の跡である場合が多い。（都市は何度も城壁を取り壊しながら外延的に拡張する。例えばベルリンでは5回、フィレンツェでは6回、パリでは5回取り壊されている。）（写真4）

城壁の中には、中心に広場、教会、市庁舎の三点セット、プラスワン（噴水）がほとんどの場合存在している。（噴水については中世期にも存在したが、広場などに匹敵するほどになってくるのはルネッサンス期になってからのためプラスワンとした。）



19世紀ヨーゼフ二世によって取り除かれた一番外側の城壁の跡。現在は環状道路（リングシュトラッセ）になっている。（ウィーン）

城壁をもつ中世都市では、この様に都市がはっきりした結晶性を持っているため、誰にでもイメージすることができ、市民の記憶に定着しやすくなっている。その都市の鳥瞰図は、市民だけでなく、絵葉書やスライドの形で広く一般観光客にも売られている。

我が国の場合は、都市に結晶性がないため、極めてイメージしにくい。磯崎新は「みえない都市」という言葉でこの様な状況を表現しているが、特に東京の場合、アメーバ状に増殖拡散した市街地では、一口で東京のイメージを語ることは不可能であり、せいぜい新宿とか渋谷といった部分をイメージできるにすぎない。この都市が見えなくなっているということこそ現代の我が国の大都市を象徴しており、名古屋もその例外ではない。

では、この都市の結晶性はなぜできるのか。この鍵をにぎるのが城壁である。前述の古

代の都市の項では「囲い地」という概念を説明したが、中世ヨーロッパにおいてこの「囲い地」は城壁という巨大な構造物として明示的に現れる。この城壁こそが、市民と市民社会を形成した鍵であると筆者は考えている。

(写真5) ウェーバーが「都市」の中で「ヨーロッパ都市は市民ある都市であるのに対し、東洋都市は市民なき都市」と述べているが、ヨーロッパにおいては国民であるより前にまず市民であり、都市に対する信頼性は国家以上に強い。

中世ヨーロッパ、特にアルプス以北の都市においては真の意味で都市が市民のための都市であり、そこに「都市の論理」の優先性が確信できる。中世の街並を絶賛してやまない鈴木成高は、著書「中世の町」の中で「都市は市民の町である時に最も美しい。」と語り、中世ヨーロッパの都市を市民精神あふれる都市の原点であるとしている。こういった中世都市礼賛者はマンフォードはじめ数多くみられるが、それは、中世ヨーロッパの都市に見られる市民精神というものが現代にも十分通用しうる普遍的原理であり、それこそが都市の原点であると考えからである。

城壁はその形成に大きな影響を与えた。中世においては城壁の意味と役割は絶対的であった。マンフォードは

「歴史の都市、明日の都市」の中で「城壁をめぐらせた都市では城壁それ自体が服従しない者を支配し、敵を監視し、絶望した者の逃亡を防ぐ全軍隊に匹敵した。」と述べているが、城壁はその様な制御機能を強く果たすと同時に市民と市民社会の形成に大いにあずかった。

城壁は、外と内とを区別する。つまり、都市の内と外とでは全く環境が異なったのである。最も重要な点は適用される法律が異なった、ということである。都市以外の地域では、封建領主の支配下にあり封建領主の法が支配するのに対し、城壁の中、つまり都市は固有の都市法が適用される独自の法領域にあった。ちょうど、都市は大きな海に浮かぶ島の様なもので、都市の支配者には、前述した様に封建領主以外にも、司教あるいは大司教など

(写真5)



- 1 ニュールンベルク (完全に旧市街地を覆い、これほど堅固な市壁はめづらしい)
- 2 ディンケルスビュール (小規模だが美しい市壁)
- 3 アウグスブルク (完全には囲まれていない。写真は市門の一部)

もなり、いずれも皇帝や国王から大幅な権利を与えられていた。

市壁の建設には莫大な資金が必要であり、最初は大司教や皇帝が建設したが、次第に財力を持つ者が建設する様になり、都市を守る軍隊がない以上、自分達で都市を守るということで市民全員が運命共同体として建設費を負担することになった。

市民の合意のみならず、建設に長期間を要することを考えれば、莫大な建設費を負担するには、各世代ごとの「必然的義務感の共有」というものが不可欠の前提としてあったことは注目すべきことであろう。こういった市民の合意形成のプロセスこそが重要で、そういった中で次第に力を持ち、都市形成に大きな役割を果たす様になっていったのが遠隔地商人であった。アンリ・ピレンヌはこの遠隔地商人が中世ヨーロッパ都市の建設に果たした役割の重要性に着目し、都市史研究における古典的学説とも言える有名な「商人定住説」を唱えた。

ピレンヌの「商人定住説」はハンス・プラーニッツにより定着し、その後修正を加えフリッツ・レーリヒ、エディット・エネンと伝わり、長きにわたり中世ヨーロッパ都市史の主要学説として認められてきたが、最近の都市史研究ではこれらの中世都市成立論に異論が唱えられ、単一の基準ではなく、都市の持つ多様性、多面性などに力点を置くべきとの論が見られる。しかしながら、少なくとも中世ヨーロッパ都市の形成において遠隔地商人を含む商人というものが大きな役割を果たしたという点は否定し難い事実であろう。従ってここでは、あえてこの点について、少し述べてみたい。

遠隔地商人とは、単なる行商人ではなく、遍歴商人とも呼ばれ、他国にまで出かけ広範囲に商売を行う商人であった。彼らがどの様にして出てきたかは記録がなく不明であるが、ひとつは農業革命による農村出身者、今ひとつは、ミニステリアル（領主の官僚達）あるいはその出身の者といわれているが実際は不明である。彼らは、「冒険好きの大胆不敵な男達であった。彼らは剣を使う術、船を動かす術を知っており、数多くの言葉に通じ、また各地の土地と人間を知っていた。」（エディット・エネン「ヨーロッパの中世都市」）そして、何よりも重要なことは、彼らがグローバルな情報をもっていたということである。例えば、今、皇帝の力はどうなっているのか、他国はどんな状況にあるのかといった国際的情報をもっていた。交通の便が圧倒的に悪い中世においてこういった情報は支配者にとってはのどから手が出るほど貴重な情報であった。しかも、商業を通じ、従来教会の聖域とされた教養の世界に、商人が文書主義という形で入りこみ、そこから広範な知識を学びとっていったため、彼らは徐々に聖職者に匹敵するインテリとなっていった。

レーリヒは、「中世ヨーロッパ都市と市民文化」の中で、フランドル都市では遍歴商人が本来の創造者であり、特にブリュージュでは商人的要素が都市生活の最初から、他地域の追随を許さぬほど指導性をもっていた、と語っている。ブリュージュの広場には現在でもその中央に民衆をひきいて都市の敵とたたかい都市を守った商人達（肉屋と織布工）の像がたてられている。（写真6）

ちなみに、1302年5月17日「ブリュージュの朝」といわれる事件が勃発している。都市壁内で織布ギルド長と肉屋ギルド長の二人がリーダーとなって暴政に抵抗、誓約者を募集したところ18日間で夜のうちに7000人が武器をとって闘うことを誓約したというものである。（「ヨーロッパ封建都市」 鯖田豊之 参照）

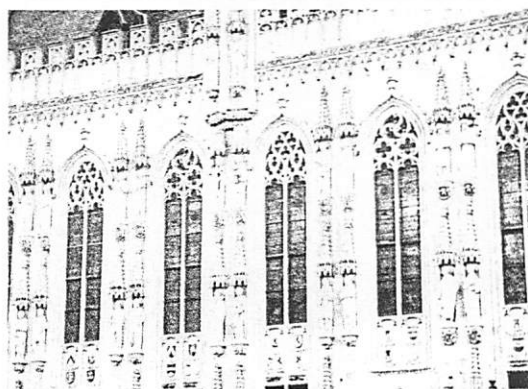
当時は、富の蓄積が製造業ではなく商業によって図られていたため、都市の形成においても最初に主導権をとったのは商人であった。その理由は、先程も述べた様に幅広い情報をもっていたため領主にとっても不可欠な存在であったからである。こういった商人も手工業者とともに市民層を形成し、都市自治が成立した後は、手工業者が「同職ギルド」を形成するなど、次第に分化がおこってくる。

いずれにせよ、こういった遠隔地商人は都市壁

（特に門）のまわりに定住した。マンフォードが言うように、門は単なる入口ではなく都市と田舎「二つの世界」が会う大変重要な場所であった。その理由は、ひとつには外敵から攻められたとき、ブルグ内に逃げ込みやすいこと。今ひとつは朝、教会の鐘とともに城門が開くため、早く市場に行き、商売ができるからであった。（門を入れてすぐのところにゆるやかな空間（ラルゴ）があり、そこが市場となっていた。）

そして、そこに旅籠が建設され、やがて旅館に泊まる旅行者にサービスをするために商人が少しずつ移動し、こうして外市（フォーブル）が誕生する。

ウェーバーは「都市」の中で、次のように述べている。「城塞のあるところ必ず領主の家計や戦士群の需要をみたすために、手工業者が住みつくか、または住まわせられるということ。そして、戦士の家計の購買力と戦士による保護とを求めて商人層が集まることは



1 ブルージュのマルクト広場（もとは魚市場）中央にたつ肉屋と織布工の像
2 ラートハウス（市庁舎）壁面のギルドのマーク。ギルドの力がいかに強かったかを示している。

当然のことである。」

この商人が力を持ち、勢力を拡大するにつれて、自らの財力で外市に城壁を建設し、自分達の地区を囲むことを要求しはじめる。そのひとつの動機としてサールマンはフォーブル市場は壁門の小さい市場と競合し、内部は通行税、売上税がかからなかったが、フォーブル市場ではかかるという不利さから都市壁を拡張し、包みこもうとする政治上の理由があったと述べている。（ハワード・サールマン「中世都市」）

すでに11世紀において商業は、8世紀から11世紀からの遠隔地商業とは異なり、都市の輸出手工業に基礎を置くようになってきた、とエネンは指摘しているが、農業生産力の上昇が人口の増加をうみ、農村から都市への人口供給に余力が出てくる。それと同時に、農村住民が都市の手工業者の買い手となった。このように、中世ヨーロッパ都市の市場経済及び流通経済の発達は、農業を背景に農業との相互作用によって成立した。都市が輸出工業に基礎を置くようになると都市と農業の分業が成立し、都市の市場が重要な役割を演じるようになる。ここに、遠隔地商業に頼っていたものが都市市場にウエイトをうつし、市場を通じて都市が経済活動の中心地となる。宗教、文化、経済、行政上の空間統合機能がこの中心地としての地位を強化し、都市が真の都市となる。この「空間統合機能」をもってエネンは「都市の最も不変な本質的な特徴のひとつ」とみている。

11世紀の叙任権闘争（皇帝と法王の対立）を契機に外市の商人が都市壁内の商人などとともに領主を追い出し、権力を奪取することに成功する。典型的な例としては、1074年のケルンの大暴動をあげることができる。大暴動を契機にこの様な運動はりょう原の火のようにライン河岸の各都市にひろがり、封建領主は暴動をおそれ、皇帝はこの際封建領主をおさえ、自らの権限を拡張しようと、それぞれが積極的に都市に権限を割譲し、ここにいわゆる宣誓共同体（コムニオン）としての都市が成立する。

「都市の空気は自由にする」という言葉にあるように、1年と1日（満1年）都市に住み、宣誓をすれば都市民として認められた。都市の運営は参事会（ラート）が行い、都市規模により12～24人位のメンバーで構成されていた。このラートの評価については諸説あるが、プラーニッツは大商人（都市貴族）から選ばれた参事会を重視し、「参事会こそ自治都市の象徴」としているが、エネンは批判的である。

レーリヒは、「参事会はイタリアでも他のヨーロッパ地域でも上層市民の機関であった。実際には何よりも上層市民が他の市民を支配する機関だった。」（中世ヨーロッパ都市と市民文化）と述べている。論点は、都市自治の中心である参事会のメンバーが一部有力商人なのか、一般市民も含まれたものなのかという点であり、このことは、権力の所在が一

部のものに独占されているか、多くの市民の民主的運営に任されているのかという重大な問題に関わってくる。筆者の意見では、一部有力商人が多かったと思われるが、それぞれの都市の成立過程により異なり、多様性をもっていたのではないと思われる。

例えば、ネルトリンゲンでは14世紀、ローテンブルクでは15世紀に有力商人の専横に不満をもったツunft（手工業者あるいは中小商人の組合）代表がツunft闘争をおこし巻き返しに成功、勝利した結果として参事会に加盟している。しかし、一方、ニュールンベルクの様イタリアの都市国家に近く、参事会が一部富裕家、大商人に握られ、ギルドさえ形成されず手工業組合の反乱も失敗に帰するなど長きにわたり都市貴族（有力商人）の支配が続いた都市もあった。

いずれにせよ、都市の成立は都市内における階層の分化とある種の階級の形成を促進していったと思われる。商人はギルドに加盟し、都市の構成員となり政治に参加する機会を得るが、農村から供給され都市労働者となった教養がなく文字の読めない農民達は、プロレタリア層（ローマの下層身分で国家による金銭と穀物の施しによって生活していた。）を形成していった。

サールマンによれば、14世紀中頃までに都市壁内の市民には少なくとも三つの主要な階層ができあがっていたという。すなわち、①少数の上級クラスで寡頭政治を執る裕福な商人、②不動産や投資からの収入でくらす都市貴族、少数の商人及び職人からなる中産階級、③都市社会の縁辺部で生活する数は多いが政治的・経済的には弱体な労働者からなる下層階級、の三階級である。

都市貴族となった商人は、都市社会の中で重要な地位を占め、石造りの家（「塔」と呼んだ。）に住み、結婚により貴族身分に同化し、その過程で生来の貴族となっていた。

（写真7）しかし、そのような人たちは住民のせいぜい10%で、大半が手工業者からなる



ニュールンベルクの貴族の家。石造りで塔と呼ばれていた。（ゲルマン的造形の建物）

る層であった。

ともかくも、一人の権力者としての領主が支配していた状況とは明らかに異なり、たとえ商人貴族であつてにせよ、一人の専横でなく、複数の合議制であったことと、なによりも市民法（都市法）を持っていた点は高く評価できる。

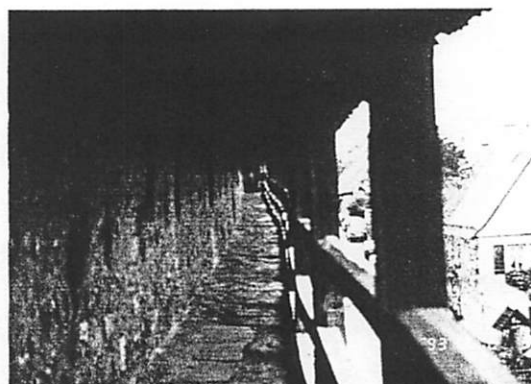
では、市民法はいかにできたか。この問いに答えるために都市壁について今一度みてみよう。長谷川堯は、「都市は何らの意味で囲い地である。」と喝破したが、くどい様だが、壁で囲うというこ

とは、内（味方）と外（敵）とを峻別することを意味する。ヨーロッパの様に陸続きの地形では闘いは民族間の闘いが多く、都市の滅亡が同時に民族の滅亡となる例もフェニキアはじめ少なくない。従って、壁の中に住むということは、運命共同体として同じ船に乗るということの意味し、共通の意識（公共意識）を育む上で極めて大きな役割を持っていた。

この共同体を維持する上で最も大切なことは、市民が定めたルールにすべての構成員が従い、全体（公共）の利益を個人の利益・都合より優先させるということについての共通の認識である。そこで、都市間の秩序と公正さを守り、平和を維持するため、ルールをやぶった者を適正に裁き、罪人には重い罰を与える必要から市民法ができてくる。その意味では裁判権こそ都市自治権の象徴とも呼べるものである。つまり、皆が従うべきルールこそ市民法の原点であり、秩序維持の要であった。ここに成立する社会が市民社会である。

極論すれば、市民社会は都市壁から生まれたといっても過言ではない。都市壁の築造と警備には大変な費用と労力が必要であった。例えばローテンブルクの場合、現在でも壁の改修に莫大な費用がかかるため国際的な寄付協力を募り、寄付者の名前を壁に掲示することにより公表しているようだが、その中には日本の企業名も見受けられる。（写真8）

城壁の構造と並んで費用のかかる公共事業は街路であった。中世都市の場合、街路は不規則で曲がっており、しかも狭かった。14世紀頃から敷石が普及し、12世紀には舗装が登場したと言われている。いずれにせよ石畳が多く、大体20cm位の立方体の石が例えば10m幅の街路では横一列約40個近く並べられている。現在でも街路工事は大変だが、これこそこだわりの精神でいくら金がかかり不便でも「アスファルトにしたのでは、我々が我々でなくなる。」ということで石畳にこだわり続けている。



ローテンブルクの都市壁の内側。寄付者の名前が書かれている。

ヴェネーボロによれば、ブルージュでは13世紀の最後の10年間における市の歳入の約1/3は都市壁と街路の舗装などの公共建設にあてられたと言われる。ちなみに市の歳出の中で一番の出費が城壁の修繕・増築であったことから当時は建設役が同時に収入役を兼務していた。

都市壁内部から共同体が崩壊するのを防ぐため、ルール違反に対する罰は厳しく、ニュールンベルク、ローテンブルクはじめ多くの都市では拷問部屋を持っていた。（ただし、拷問はもともとゲルマンの発想ではないと言われている。）また、処刑がひっきりなしに

行われ、ルールの遵守を公平にするためブタなどの動物に対しても執行された。

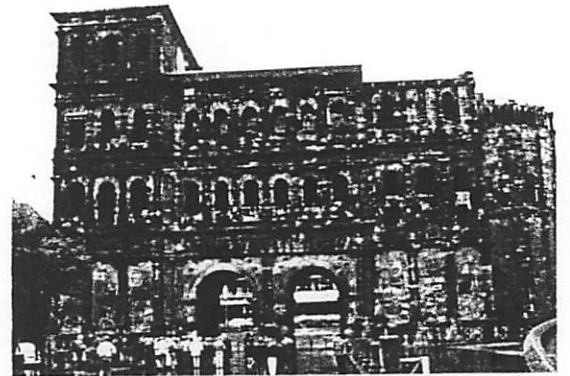
処刑は広場で行われ、執行後は晴れ着でパーティを行ったとも言われる。今でいうイベントさながらであった。（堀田善衛は「路上の人」の中で「火刑は大抵は町村の祭りの際に執行された。見せ物の一つとは言わないまでも、それに近いものとして行われるものであった」と書いている。）一見残酷ともみえるこの慣習は、むしろ市民法が樽守されていることの証として考えることができる。恐らく、当時の市民の感性と今日の我々のそれとは大きな隔たりがあるのであろう。当時としては合理的であったと思われ、今日の常識でははかれない。ホイジンガは、名著「中世の秋」において、「処刑は民衆の心に糧を与えた。それはお説教付き見せ物だった。」と述べている。また、当時のパリの一市民の伝聞として、処刑を見るために6000人が土曜日の夜、よい席を確保しようと野原に一夜を明かしたとも記している。

中世の裁判は、最大級に残酷な刑罰か、それとも赦免か両極端しかなかったが、この時代の無情さの裏には、どことなく「無邪気」なところがあり、生活は激しく多彩な中で”血の匂いとバラの香り”を共に帯びていた。とホイジンガーは語っている。

この様に「都市の自治はひたすら公益優先に徹した市民の団結の上に打ち立てられた一種の金字塔」と言えるのではないだろうか。

写真9

ただ注意しなくてはならないのは、中世ヨーロッパ都市の成立もアルプスの北と南とでは全く異なっていたという点である。まず、ライン河の東西でもローマの影響のあるなしで都市の形態が異なる。これはライン河が大きな城壁の役割を果たし、ローマ軍の占領地がライン河の左岸で止まったためである。左岸に立地するケルン、トリアはじめ多くの都市がローマタウンとしてローマの影響を受けているが、右岸では異なる都市形態を示す。（写真9）また、エルベ河以東では、いわゆる建設都市が多い。従って、典型的な帝国自由都市が見られるのは、南ドイツにおいてである。（帝国自由都市は14世紀にドイツ全体で54と言われている。）

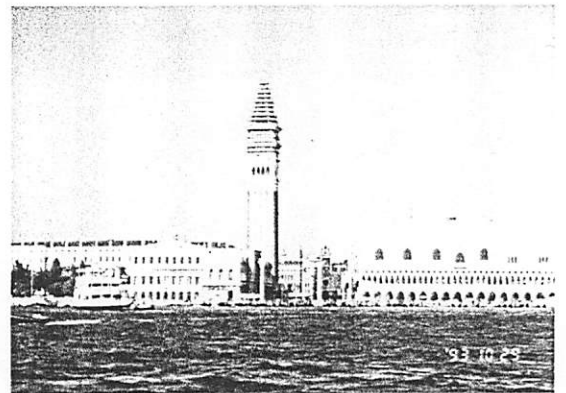


ローマ軍がゲルマンに侵略した時の最前線基地。2000年の古都（ドイツの奈良）トリアのポルタ・ニグラ（黒の門）。ローマ軍による建造物。トリアは紀元4世紀人口8万人をかぞえ当時最大の都市であった。

フランスやスペインの様に絶対王政下で中央集権制が支配的であった国においては本来の意味での都市は期待できない。従って我々が求めている市民による本来の都市はせいぜいドイツとイタリア、それにフランドルの一部位であろう。しかし、基本的にドイツとイ

タリアでは都市のあり方が異なる。イタリアの中世都市については、中世都市論の古典とも言える「中世の都市コムーネ」の中でニコラ・オットカールは、アルプス以北の諸都市と比較して、イタリアの中世都市は封建的要素を色濃く持ち、都市と農村との分離が明確に行われなかったことを指摘している。従って、結局はドイツそれも南ドイツにおいてということになる。

イタリアの都市とドイツの都市が異なる原因は地政学上の問題であると思われるが、少なくともイタリアにおいては経済的要素よりも政治的要素がドイツに比べて上回っていたと考えられる。典型的な例をヴェネツィアにみてみよう。ヴェネツィアは、紀元5, 6世紀にヴェネツィア族が築いた漁業と製塩の町で、ナポレオンに屈服するまで共和制の独立都市国家であった。地中海を中心とした海洋国家であったヴェネツィアは、主にビザンチンから胡椒などの奢侈品を購入し、ヨーロッパ各地に売りさばき利益を得た。海洋商人にとって船は財産であり、そのため制海権の確保が最大の課題であった。従って、どうしても他国、他都市との関係を良好に保つため、政治外交上の駆け引きが不可欠であった。ひとつ間違えば破産するが、成功した場合には巨万の富を得ることができる。いわばハイリスク、ハイリターンの商売がヴェネチアの商売であった。こうして成功し、富を得た商人はそれぞれの都市を支配し、その都市に君臨することになり、都市が同時に国家であるといういわゆる都市国家という形態が誕生する。例えば、フィレンツェのメジチ家、ミラノのビスコンティ家（ただし、ミラノはフィレンツェの様な都市国家にならなかった。）などはその代表的な例である。ヴェネツィアは十人委員会という合議制をとったためヴェネツィア自体は典型的な都市国家の例であるが、フィレンツェのメジチ家の様に一人の商人貴族に権力が集中するということにはなかった。（写真10）一方、ドイツあるいはフランドルでは手工業が中心であったため、原価がはつきりしており、取引も穏当であった。従って、これらの地域では、アウグスブルクのフッガー家は別として、一般的にはイタリアに見られる様な巨大商人資本は成立せず、都市は農村との共存関係を保ちつつ着実に発展していった。



十人委員会と呼ばれる合議制の場であるヴェネチアのドカーレ宮（政庁舎）。白とピンク色の大理石製で軽やかに水面に浮いているように見える。

以上、ヨーロッパ中世都市の形成について述べてきたが、この項の最後に中世都市における三点セット・プラスワン（広場・教会・市庁舎+噴水）についてふれておこう。というのも、

中世都市には防塁である軍事施設にあたる都市壁の中には必ず、経済活動の中心である広場と、精神活動の中心である祈りの場としての教会、そして都市経営の中心である行政の場としての市庁舎、それに美しい噴水があるからである。

①広場と教会

ドイツの場合、中世都市の広場はマルクト広場（市場広場）が多い。一般的には、祈りの場である聖堂こそ人が集まる場所で、人が集まる近くに市場ができるため、教会の前の広場が市場である場合が多いが、市庁舎（ラートハウス）の前にある場合もみられる。市庁舎と教会とは一般的に近くに位置しているが、権力のバランスによって配置が異なっている。この市庁舎、教会、市場三者の位置関係をみることによって当時の権力関係を理解することができる。

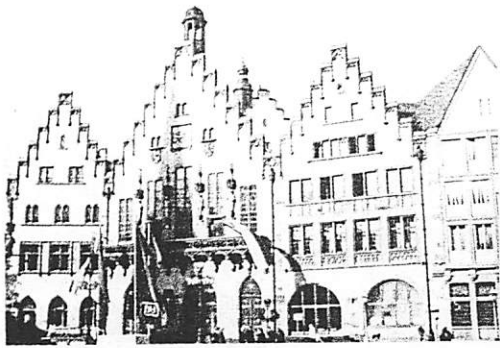
フランドル地方のブルージュの場合を例にとれば、マルクト広場はベルフォールトの鐘楼（ギルドハウス）の前にある広場で、商人の力が強大であったことを意味している。西暦1300年頃ブルージュはイギリスの羊毛の大陸における集散地となって以来、フランドル織布工業の独占的地位を確固たるものにした。ブルージュにはあらゆる地域の商業路線が入り、港口が土砂で埋まり機能が低下したことにより、15世紀中頃から衰退し、その地位をアントワープに譲るまでハンザ同盟の中心「黄金の世界」として大いに繁栄した。ブルージュの上層市民が市域の拡張、公共建築物や防御施設のために提供した財政上の負担は巨額なものであったと言われ、そのことは当時の商人がそれに耐えうるほど莫大な財力を持っていたことを意味している。

広場の大きさは教会の規模とほぼ相関関係があった。教会関係者（大司教または司教）あるいは、皇帝が市場の開設を許可していたが、やがて権力を奪取した市民が近くに市庁舎（ラートハウス）を建設すると、広場の中心は市庁舎の前に移動した。いずれにせよ、意図的な広場は、史上初めてギリシャに登場し、メソポタミアには大きな道による軸こそあったが広場はなかった。バロック以降、広場は権力者のデモンストレーションのための空間に変わったとはいえ、広場こそ人々が集い、交流し、議論する民主的空間であろう。

②市庁舎

中世都市の市庁舎はいずれも美しく豪華である。その都市を訪れると、観光の最大の目玉が教会と市庁舎という中世都市は多い。例えば、フランクフルトではレーマー（市庁舎）が市民の間でも最大の人気施設となっている。（写真11）

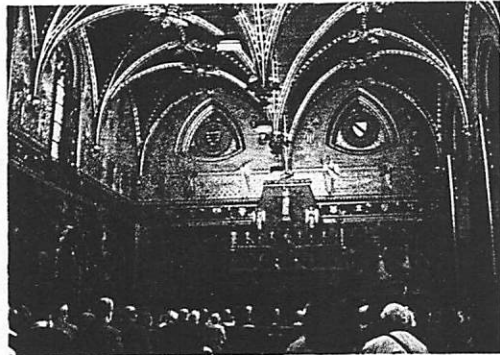
都市を訪れて、市民にどこを見たらいいか尋ねると、たいてい市庁舎という答えが返っ



フランクフルトのレーマー（市庁舎）。神聖ローマ帝国皇帝戴冠レセプションの場でもあった。



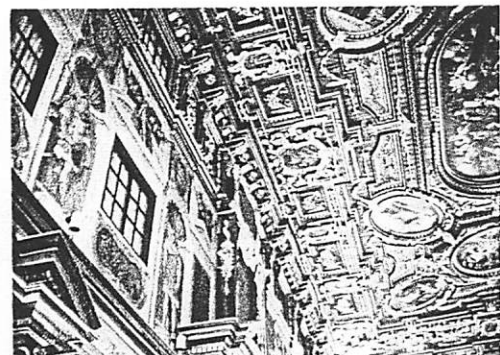
ブルージュの市庁舎（1376年着工、ゴシック様式、フランドル最古の建物



ブルージュ市庁舎二階のゴシックホール。当時の富を反映して豪華。一般に開放され結婚式やレセプションに使われている。



名建築家エリアス・ホルの設計によるアウグスブルク市庁舎（17世紀、ルネサンス様式ではドイツ最大）とペルラッパ塔（物見の塔）



上 アウグスブルク市庁舎三階のホール
右 ドイツの小ヴェニスといわれ、赤い瓦屋根が美しい水の町バンベルクの市庁舎

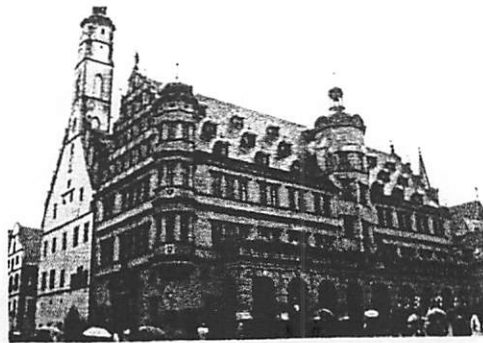
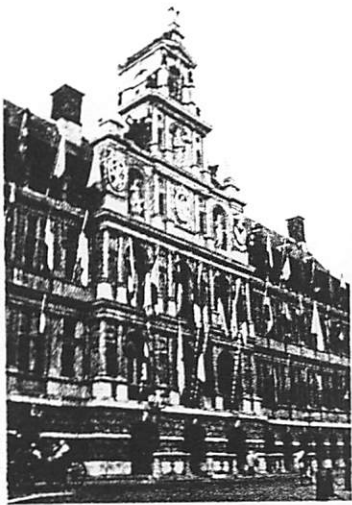


てくる。また、ブルージュ市庁舎の二階ホールの様に現在でも一般市民に開放されているものも珍しくない。後述するが近代になるとバロック都市が現れ、絶対王制の国家の首都を中心に王権の象徴である宮殿が最も豪華になっていくが（ブルボン王朝のベルサイユやハプスブルグのベルベデーレ、シエンブルンなど）

（写真12）そうした中でもドイツの帝国自由都市の場合、エリアス・ホルのアウグスブルク市庁舎の様に市庁舎が最も美しいケースが多い。このことがドイツをして分権主義の模範の様に言われることもあるが、中央集権化ができなかった国内事情もあり、そうならざるをえなかつた

たと言う側面があったことも確かであろう。（特に1618～1648年ドイツ30年戦争の影響がかなり大きいと思われる。）

とはいえ、中世都市は市民の町であり、自治の精神というものを町全体から感じ取ることができ、その意味では豪華なバロックの宮殿よりもはるかに高い精神性を持っていると言えよう。（注 市庁舎については、必ずしもすべてが中世のものではなく、その後のルネサンス期のものもあるが、バロックではないという意味で中世的な要素が残っている



左 フロリスのデザインによるアントワープ市庁舎(16世紀建造のルネッサンス様式。黄金時代のギルドハウス)
上 ローテンブルクの市庁舎。16世紀のルネッサンス様式と13世紀のゴシック様式の混在が見られる。

写真12

ものを取り上げた。)

③噴水

広場にはたいてい噴水が見られる。(もつとも現在残っているものは、ルネッサンス以降のものが多い) その中には井戸である噴水もみられる。特にローテンブルクでは、高地にあることもあり、水の供給が都市にとって最大の課題であり、苦勞し

て水を供給することができた喜びを噴水という形で造形的に表現している。(写真13) 町のいたるところ



ウィーンのアウグスト王の冬宮 シェーンブルン宮殿

写真14

に井戸(噴水)があり、城壁の塔(クリンゲン塔)が給水塔の役割を果たしているのは象徴的である。(写真14)

一方、スイスのベルンの

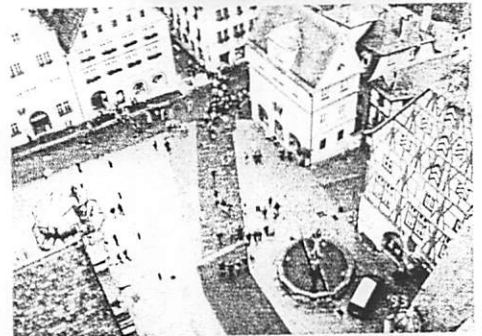
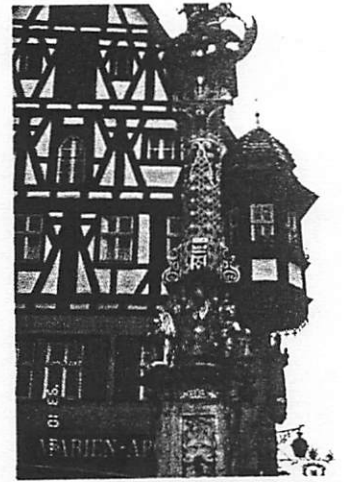
様にメインストリートの中央に11基の噴水を配置してアクセントをつけて

いる都市もあるが、(写真15) 噴水を街作りの中心に据え、噴水を核とした街ができあがった都市としてアウグスブルクは興味深い。そこでは市の繁栄とその将来像を具体的な造型として視覚化するため、三基の噴水を200m間



ローテンブルクのクリンゲン塔。城壁の塔が給水塔の役割を果たしている。(水路は最高機密とされていた)

隔にメインストリートに配置し、それが都市の中心軸を形成し、建築がその後からついてくるという形をとっている。



上 ローテンブルク市庁舎前広場の噴水
下 広場内の噴水の位置に注目(広場の中央におかず、交通の流れを阻害しないよう死角に設置している。)

これらの噴水はいずれも何らかの喜びを造形的に美しく、視覚化している点で共通性が

写真15



スイスのベルンのメインストリート、シュピタル通りに配置されている噴水。16世紀に建設。11基設置

写真16



アウグスブルクのメインストリートの噴水。200m間隔に3基が都市軸状に配置されている。市電が噴水をよけて走っている。

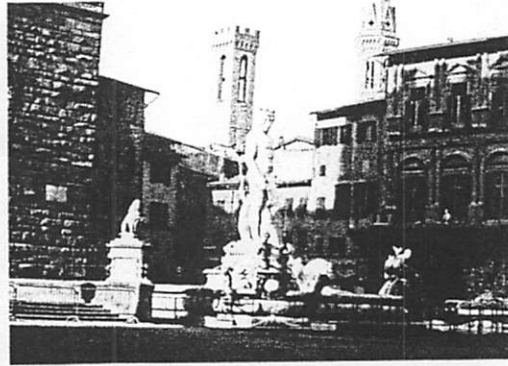
あり、それがその町の見所の一つとなっている。(写真16) この点については、中世に限らずバロック都市ローマやルネッサンスのフィレンツェについてもみ

られる。例えばローマのナヴォーナ広場、フィレンツェのシニョーリア広場のネプチューンの噴水などに代表されるように、古くからコンペで優れた噴水が作り出されている。

(写真17)



ローマ ナヴォーナ広場の噴水(ローマ時代の競技場の跡。まるで陸上競技のトラックのよう) ベルニーニ作ネプチューンの泉



フィレンツェ シニョーリア広場の噴水。バルトロメオ・アンマナーティ作

以上、中世ヨーロッパ都市に共通の三点セットプラス・ワンについて簡単にみてきたが、私たちがヨーロッパの諸都市(特に南ドイツ)を訪れる



上 有名なローマのトレビの泉(中央はネプチューン、コンペで優勝したニコラ・サルビーノ作)

左 ボローニャ市庁舎前の噴水ネプチューン(ジャン・ボローニャ作。16世紀の最高傑作のひとつ)

時、必ずと言っていい程感じるのは都市がコンパクトでヒューマンスケールであると共に、明示的であるという点である。旧市街地は城壁に囲まれ、中心には必ずと言っていい程三点セット・プラスワンがある。この都市の結晶性こそが、都市壁によって形

成されてくる市民並びに市民社会の総体を空間的に都市造形として表現したものに外ならない。

神聖ローマ帝国全体の中で都市に与えられた都市特権の文書が現存する最古のものであるとされるベルギーのウィの栄光と衰退の歴史を研究したアンドレ・ジョリスは、その著「西欧中世都市の世界」の中で、市壁が城と市民の集会地という二つの都市的核を決定的に融合せしめ、都市の中心性を確たるものとし、都市に結晶性を持たせたと述べている。そして、中心性こそが彼の長年の研究から最終的に引き出された基本的要素であり、都市における不可欠の核をなすと指摘している。ジョリスが主張する「都市の中心性」こそ、エネンが都市の最も不変な本質的特徴であるとする「空間統合機能」を視覚化したものである。

視覚化する場合には、誰の目にもとまるように建築物、構造物という形で造形化されるが、F・レンツ・ローマイツ女史は、「都市はふるさとか」という著書の中で、中世都市を「統合された社会システム」と呼び、建築物こそが、社会の行動状況を具現化したものとし、シンボルとなると指摘している。彼女は視覚化することの重要性を「視覚化することにより人々の意識の中に共有化をはかることができる。」からであるとし、「真の都市の市民たる精神的ベースというものは、シンボルが自己実現の中に組み込まれるという事実が存在する。」と主張している。「場所への象徴的な愛着」であるふるさと意識は、近隣社会の関係を蘇生させるよりも「象徴的シンボル体系」をつくり、それを目に見える形で視覚化することの重要性を説いている。

まさに中世都市こそ、S・ギーディオンが言うように市民の統合された努力によって発展させられ、その細部の隅々に至るまで素晴らしい力が行き渡っている都市である。(S・ギーディオン「空間・時間・建築」)そして、そのことが長きにわたりそこに住む都市市民の心の中に深くシンボライズされるとともに、そこを訪れる人々に深い感動と真の都市の意味を考えさせられるきっかけを与えるものである。

(3) バロック都市

前項で中世都市を取り上げたが、通常、歴史上の分類からすれば、近世はルネッサンスに始まるとされているため、順序からすればルネッサンス都市を取り上げるところだが、ルネッサンス都市は、中世都市と近代都市の橋渡しの位置にあり、中世都市の不規則さに比べれば、規律と秩序に対する一定の意欲がみられ、その意味では都市計画的ではあるが、近代合理主義の精神を都市造形の上に具現化し、産業革命以降の近代都市の萌芽がはっきりみられるのはバロック都市であるため、ここでは論点を明確にする意味から主にバロック都市を取り上げることとする。

マンフォードによれば、ヨーロッパ文化の真のルネッサンスは12世紀から徐々に始ま

ったとされるが、14世紀のペストの大流行は控え目の推定でもヨーロッパの全人口1/3～1/2は消失したと言われる。この暗黒の世紀を通り過ぎ、地中海貿易による富を背景に最初のルネッサンスがイタリアのフィレンツェで花咲く。絵画の分野においてはジョットが、また、建築の分野においてはブルネルスキが最初のルネッサンス人であると言われている。(写真18) ギーディオンは、「空間・時間・建築」の中でルネッサンス精神が



アッシジのサンフランチェスコ教会にあるジョット作「泉の奇跡」

最初に現れた建物としてフィレンツェのスペダーレ・デリ・インノチェンティ前面の回廊を取り上げている。このインノチェンティ(孤児養育院)については羽仁五郎が世界で最も美しい建築と絶賛するもので、当時の時代のいぶきを感じ取れる作品である。

ルネッサンスは、また、中世のギルド社会の足元を揺さぶり、始めて芸術家という概念を作り出した。彼等はギルドから独立し、個人的に委託者と契約をかわし仕事をこなした。ジャン・ジャンペルは、「カテドラルを建てた人々」の中でブルネルスキがギルドの負担金支払いを拒否したが、その才能を高く評価した教会側が彼をかばい、職人から脱皮し、芸術家になったと記している。

この時代には、フィレンツェを中心にメジチ家という強力なパトロンの庇護を受けた、ミケランジェロ、ダヴィンチなど多数の天才芸術家が活躍をした。ブルネルスキが設計したフィレンツェのサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のクーポラは、中世最後の壮大な建築様式であるゴシック(北方蛮族風)を超克しようとするもので、新しい時代の幕開けを飾るにふさわしい傑作であった。(写真19)

城郭の変化についてしてみると、火薬の発明と大砲の出現が、これまでの中世の単純な環状型の城壁に大きな変更をもたらした。

ルネッサンス期では、軍事技師がまず城郭を定め、それに合わせて都市内部の計画を定めていった。例えば、フィレンツェがフランス軍の侵攻をうけた折り、ベルニーニが建築家としても超人的であったと高く評価するミケランジェロを軍事技師に任命し、城塞の構築にあたらせた様に。当時のルネッサンスで理想とされた都市の形態は多角形の星状型で、放射状道路が中心部へとひかれているのが



ルネッサンスの幕開けを告げるフィレンツェのサンタマリア・デル・フィオーレ教会のクーポラ(ブルネルスキ作、1420～1434)

基本的な形であった。デューラー、ダヴィンチなどの築城術の延長線上に17世紀の偉大な技術者ヴォーバンが登場し、築城形式はピークを迎える。ルイ14世などは仏の地方の諸都市にヴォーバンを派遣し、築城にあたらせたほどである。

フィレンツェがフランス軍の軍門に降るとルネッサンスの中心はローマに移った。中世の時代にはさびれて荒廃した村にすぎなかったローマも1500年頃再び隆盛の時期を迎え、その後の約150年間ルネッサンスの中心として栄えた。その頃のローマには、フィレンツェ革命に巻き込まれ、失意のうちに再びローマにやってきたミケランジェロがいた。彼は長寿であったことと、彼自身の天才的能力と薄弱な意志との葛藤とにより、ルネッサンスとバロックの橋渡しを自ら演じた人物であった。そして彼の死後21年後、シクストゥス5世が1585年ローマの都市改造をはじめてから、ローマはルネッサンスの都市規模を一掃し、バロックの都市になっていった。シクストゥス5世はローマの栄光を再び呼び戻すため、古い遺跡どうしを直線道路で結び、巡礼の道をつくり出そうとした。古代ローマの都市造形の特徴は、まず、①道路が直線であること、②都市の中心部が直角交差の主要街路で区切られたグリッドパターン型になっていること、であるが、ローマではポロ広場（ボローニャでも同様の街路パターンがみられるが）に収れんされる斜行街路をもつ都市パターンが次に現れてくる。

ここにはオスマンのパリに代表されるバロック都市最大の特徴のひとつであるブルバールの先駆的試みがみられる。

こういった直線的な都市プラン発展の背景には16世紀になると二輪、四輪馬車が都市で一般的に用いられるようになったという事実がある。

もともとパースペクティブ（遠近法）はルネッサンス期に発明されたといわれるが、考え方はバロック都市のもので「政治と領地を整然とした秩序にとりこむ考え方である」とマンフォードは述べている。バロック都市ローマには壮大なビスタ（見通し）がみられ、そのビスタの先には無限に続くと思われる街路か又はフロンタリティ（正面性）としての壮大な建築物が配置された。（写真20）



フロンタリティーの見本ともいえるパリオペラ通り正面のオペラ座（シャルル・ガルニエ作）

当時のバロックローマを演出したのはベルニーニであったが、サンピエトロ寺院の柱廊や聖女テレサの法悦などにみられるように彼ほどバロックの神髄をみせてくれる人物は他にみあたらず、ベルニーニ的傾向といえば、それは

バロック様式の代名詞そのものであった。(写真21)

彼の特徴は、作品を単体としてとらえるのではなく、その位置、環境を視野に入れた空間全体をとらえるやり方で、バロック都市がもつ都市景観そのものを演出するのに最適であったと思われる。

15～16世紀にかけて起こったグーテンベルグによる印刷機の発明と宗教改革、羅針盤の発明と大航海による地理上の発見、そして、コペルニクス、ガリレオなどによる天動説から地動説への転換、こういった一連の動きは、国王の権力の強化と中央集権化を促進し、16～18世紀には絶対王政の時代を迎える。

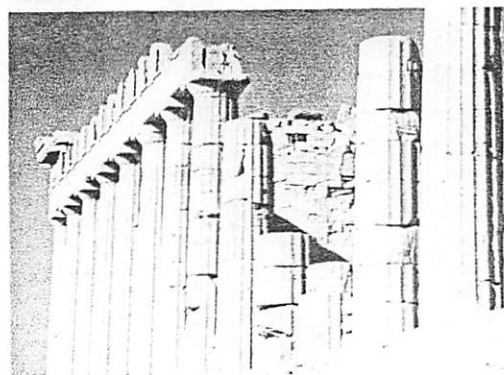
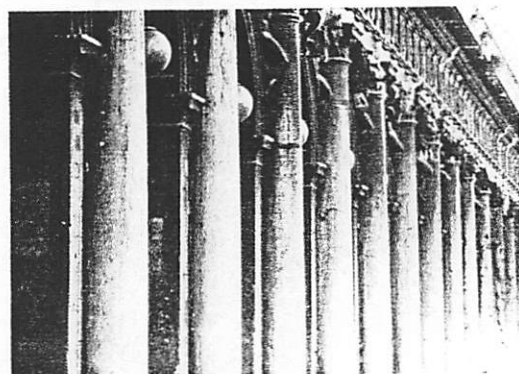
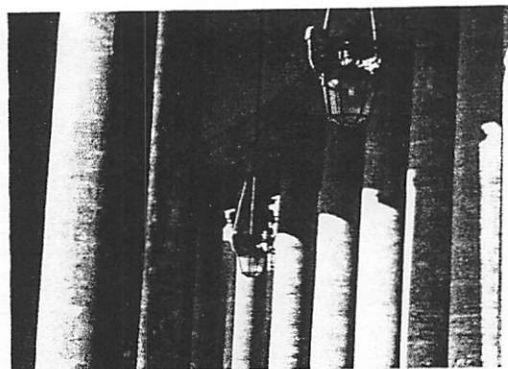
今井登志喜は、「都市発達史研究」の中で16～18世紀を「首府の時代」と呼んでいるが、まさにこの時期にこそ絶対主義が確立された時期で、ロンドン、パリといった首府が脚光を浴びた時代であった。木原武一は、その著書「ルイス・マンフォード」の中で首都がつけられる経緯を次の様に説明している。「中世では王の権力は移動的であった。ところが15、16世紀に絶対権力が成立すると権力機構が移動にたえないほど大規模となりこれを収容するものとして首都がつけられた。」

中世のゴシック教会がどこまでも垂直に高くのび、カソリックの権威を見せつける演出であったのと同様、絶対王政はその王権をバロック都市という都市造形の中に演出した。

宇田英男は、「誰がパリををつくったか」の中で、「ベルサイユ庭園の様に王の視線が宮殿の中央から真っ直ぐに限りなく伸びることは絶対王朝時代の美学である。」と述べ、

「視線の政治」という表現を使っている。(写真22)

この視線の政治が成立するには、見る側(主体)と見られる側(客体)の明確な分離が不可欠で、これこそが17世紀に登場するニュートン、デカルト的パラダイムであり、こ



- 1 ベルニーニ作のローマ サンピエトロ寺院の4柱列の楕円形回廊(1656～67年)
- 2 ヴェネチアのサンマルコ広場に面したマルチアーナ図書館の回廊
- 3 アテネのパルテノン神殿のエンタシス柱
それぞれ比較してみると興味深い

の「機械論的世界観」こそが近代合理主義精神のあらわれである。合理論の祖といわれるデカルト（1596-1650）は、経験に基づくものは不確実であるとして退け、幾何学の公理を軸に演繹的に思考をし、疑わしきものをすべて疑い、なお疑いきれない自己にたどりつく。（コギトエルゴスム）これこそが自己を主体として自覚し、それ以外を他者として認識する二元論であり、近代合理主義のベースとなる哲学であった。デカルトの登場により、中世におけるキリスト教神話にかわり、近代科学が新たに神話となった。

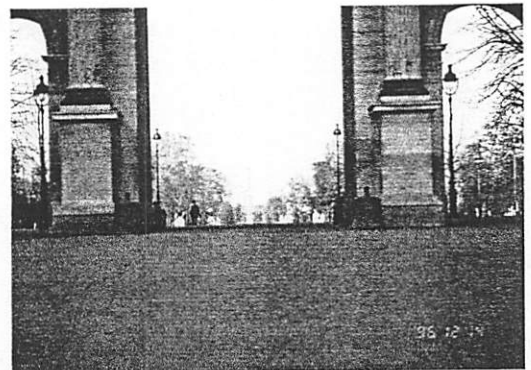
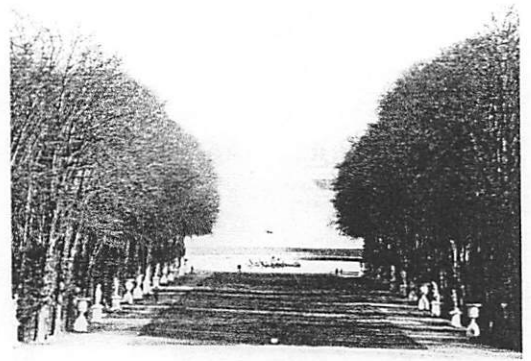
西欧では中世においては神の眼を強く意識してきた。従って、外形を重視し、各戸は通りを介してそれらが集中する広場に通じ、その広場にある教会を通じて天にある神につながる。そうした形で一人ひとりの個人が神につながると考えられてきた。「世間の目」という他人の評判を常に気にする我が国と異なり、絶対者である神の目を常に意識する西欧人は同時に組み立てられた言葉であるロゴスの世界に生きる人達であった。「始めに言葉ありき、言葉は神とともにあった」と西欧ではいわれるようにロゴスの世界は秩序だった世界であり、強く人間の意思を感じさせる世界でもある。建築物で言えば、それは外の空間と調和するのではなく対峙する対決型の建築物である。デカルトの二元論こそ外と内、主体と客体とを峻別する考え方であり、近代合理主義の精神そのものであり、同時にデカルト的秩序こそがバロック都市の造形であった。

すでに見てきた様に、ヨーロッパにおいては城壁という構造物が外部と内部に空間を二分し、敵と味方に分ける役割をはたしたが、それは同時に自然の森を破壊し、人間の強い意思と力で人工物である都市を構築した歴史そのものがそのベースにある。都市の誕生そのものが人間の自然と風景に対する暴力的意思のあらわれである。

まさに、マンフォードがいうように「神が自然をつくり、人間が都市をつくった。」のである。

バロック都市と中世都市とを比較してみると、中世の都市はヒューマンスケールであり、

(写真 2 2)

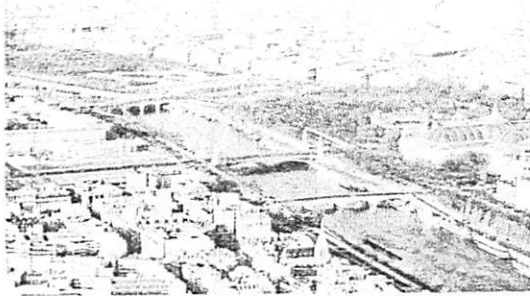


バロック時代特有の無限のヴィスタ（視線の政治）
 上 ベルサイユ宮殿
 下 パリのカルーゼル凱旋門からコンコルド広場の
 オベリスク、エトワール凱旋門、デファンス地区の
 ラ・グランド・アルシュに至る軸線

不整形である。それは、自然に逆らわず、自然の地形にそって都市をつくってきたからである。

一方、バロック都市は人間の強い意思と力で都市を改造したために、軸線と直線の特徴としていた。中世都市では比較的コンパクトな城壁の中で中心性をもち、それが教会の尖塔を中心に垂直にのびていた。

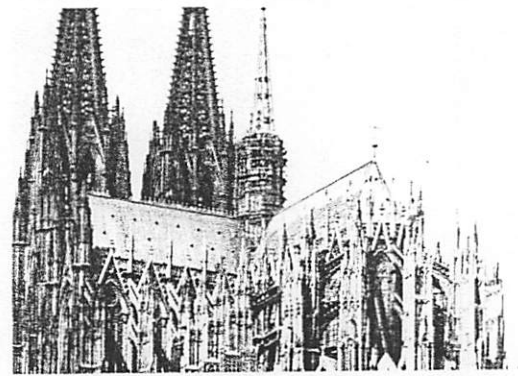
これは中世都市の特徴のひとつで、古代には塔というものは存在しなく、中世教会建築とともに登場してくる。マグダ・レヴェツ・アレクサンダー女史は、その著「塔の思想」の中で、塔の本質について「自己自身から出てそれをのりこえ無限の空間を結合しようとする」と述べているが、これこそが前述した様に、中世都市の本質としてエネンが主張する「空間統合機能」を造形化したものに外ならない。(写真23) これに対してバロック都市はブールバー(大通り)を中心に水平的に拡張し、どこまでも外延的にひろがる都市である。(写真24)



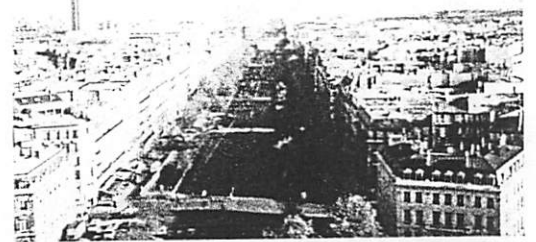
中世都市の垂直立体性に対するバロックの水平拡散性
上 エッフェル塔からみたパリ市。茫漠と果てしなく続く街並み
下 エトワール凱旋門からみたフォッシュ大通り。バロックの特徴である整然としたブールバーがみられる

後期バロックの代表はオースマンによるパリの大改造である。ヴォルフガング・ブラウンフェルスが「西洋の都市」の中で「17世紀以降のパリはひとつの美的原理に基づいて都市を構築しようとする国家的意思が

建築物と街路に必然性を問うている。」と述べている様に、バロック都市パリには絶対権力者の意思が都市造形の中に明りように現れている。ナポレオンの様な権力者が最も美しい都市であると評価するのはそういう理由からであろう。

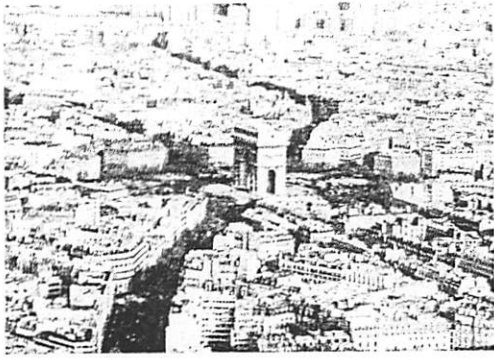


垂直にのびる中世都市のシンボル ゴシック建築の代表ケルン大聖堂 (1248年起工 1880年完成高さ157m)



エトワール凱旋門からシャンゼリゼを見下す。遠方にラ・デファンス地区。近年パリの屋根を崩す高層建築が見られるようになった

確かにパリにはドイツの諸都市にみられないバロック都市独特の威圧感がある。(写真25) それは、次のコルビジュに続く人間の強い意思のあらわれを直線に見いだして都市



上 バロック都市の代表パリ エトワール凱旋門付近
下 ハプスブルグ家のシェーンブルン宮(ベルサイユを模したバロック的宮殿)

を構成しようとする考え方の反映であろう。バロック化のプロセスは同時に都市の市民が国家の一員として組みこまれていくプロセスでもある。こういったオースマンのやり方にウィーンの都市計画家カミロ・ジッテは反発し、中世の方法へ復帰すべきことを説いている。ジッテは、中世の都市の有機的な成長の中にこそ都市を人間化していく方法を見いだしていた。それは同時に、敬虔なクリスチャンであったガウディが「自然には直線はどこにもない」と述べ、人間がすることは神が創造主である自然を模倣することであると述べていることに通じる。

近代のはじまりとともに、人間の敬虔さ、謙虚さは徐々に姿を消し、人間の強い意思と力を賞賛し、合理的で科学的な考え方こそが正しいとする傲慢さが次第にひろがっていった。中世の時代の神の呪縛から解放され、新たな神を科学に見いだした人間は、神を恐れる謙虚さを

中世に残し、ますます傲慢になっていった。

この時代の大規模な都市改造はパリに限らずフランス全土で「オースマン化」という名で広がった。特に、1832年のコレラの流行を期に病の源であるとされた中世都市を改造することが社会的に認知された。道路はただつながっているのではなく、ある目的地と目的地とを結び、その途中に様々な都市施設が配置された。まさに、分業が道路を通じて都市の内部で協業化された。ここで注意すべきことは、この都市内部における分業化と協業化、そして道路を仲介とする交通の発生には産業革命による労働と生活の空間上の分離というものが前提にあるということである。

18世紀のバロック都市パリは「眼には天国、鼻には地獄」といわれるように外面上の美しさと隠れた部分の醜さが同居した都市で、虚実いりみだれた都市である。その点では中世都市に見られるヒューマンスケールの街並みとそこから醸し出される暖かさ、そして高い精神性に欠けていると思われる。しかし反面、同時にバロック独特のスケール観とダイナミズムは都市デザインの概念を念頭において考えられたもので、その荘厳さには圧倒されるものがあるのも確かである。マンフォードは、バロック都市を機械的な都市と位置

付け、中世都市の有機性に欠けるとしており、ベルサイユを「だだっ子の玩具」と酷評している。また、マンフォードは宮殿、大蔵省、牢獄、気狂い病院の四つをバロックの特徴を表している建築物としてあげ、これらの建物を組み合わせればバロック社会ができるとしている。彼の指摘の中で、重要なのは「バロック都市の形式的な優雅のうちに産業都市の索莫とした機械的分割をすでに見出だすのである。」という点である。これこそがバロック都市のもつ機能分化という点で、都市内における諸施設を機能的に分化し、組み立てようとするものである。その様にして、都市の経済性、機能性はより高まることになり、ここに都市は人間の手をはなれ、資本主義の精神である経済の論理に身を委ねることになる。

(4) 近代都市

産業革命は都市のあり方に決定的な影響を与えた。世界で最初の産業革命は、イングランドで起こるが、それは綿加工機械と蒸気機関の発明から始まったと言われている。

(18世紀末にイングランドで起こった大規模な工業化を産業革命と名付け、一般的に普及させたのはトインビーであるが、ジャン・ジャンペルなどは産業革命は18世紀末に突然おきたわけではなく、11～13世紀にかけて開発された各種の技術革新をベースにして、18世紀末にそれらが飛躍的發展をとげたにすぎないという説にたっている。(ジャン・ジャンペル「中世の産業革命」) また、マンフォードも同様に、中世からの時計、ガラスなどの諸発明が18世紀産業革命を準備したという説にたっている。筆者も同感だが、ここでは、とりあえず、産業革命は18世紀イングランドで最初に起こったとしておく。)

機械の発明前までは、紡績と織布は家の中で行われていた。妻と娘が糸を紡ぎ、夫がそれを織るという具合に織工の家族はたいてい都市近郊の農村に住み、賃金でそれなりに生計をたてることができた。それが1764年ハーグリーブスがジェニー紡績機を発明して以来、織工はこれまで工作織工と呼ばれ畑仕事と兼業していたものが、畑から離れ織工に専業することになった。また、産業革命は、中世を支えてきたギルドの組織を解体し、熟練工というものを駆逐してしまった。(いつの時代でもそうだがこういったドラスチックな時代の転換期にあっては必ず滅びゆくものの中に美意識を見出し、その価値を再度見直そうとする運動が起こるが、1880年代にかけて今一度手仕事の重要性を問いかけるラスキン、モリスのアーツ・アンド・クラフト運動などはその代表で、しばらくは新旧相互のせめぎあいが続いた。)

この産業革命の流れを決定づけたのが1785年のワットによる蒸気機関の発明であっ

た。蒸気機関の登場によって紡績機械と機械織物は、動力を蒸気機関に依存することとなった。そうすると、運転するベルトやシャフトから動力を得てくることになるため、一定の範囲内の機械の数が多ければ多いほど動力源として効率がいいということになる。しかも、蒸気機関は火夫と技師が絶えず見張っていなければならないため規模が小さいものより大きいものの方が効率がいい。ここに巨大化が生じてくる。そして、織物工業もこれまでの分散していた組織から大工場に集中することとなった。

これまでの様な手工業は、人間が行う手仕事であるため、絶えず多様性を示し、どの製品をとっても一つとして同じものはないのが特徴である。それに対し機械は、全く正反対で善し悪しは別として、常に画一的で均質的な製品の生産を可能にした。同じ物を大量に生産できるということは、当時とすれば画期的なハイテク技術であり、ここに技能を中心とした質の良さから技術を中心とした量の時代へと時代は大きく転換することとなった。

この様にイギリスでは綿布を中心とする繊維産業を中心に産業革命が進んで行くのだが、その理由は、一つは羊毛に対して綿布は引っ張りの力に強く、機械化に最適で、しかも大規模プランテーションにより大量かつ安全に供給が可能であったことによる。今一つは、繊維工業は多くの行程を必要とするシステム産業であり、イギリスではすでに問屋制家内工業が存在していたため、技術革新が起こった時、一気に対応できたという理由による。

さらに重要な産業革命の技術的側面は、石炭である。イギリスの炭鉱は露頭という地表にあるため、容易に採掘可能であり、この化石燃料を掘り出して、蒸気の動力に利用したことがイギリス産業革命を成功させた鍵であるといっても過言ではない。同時期、燃料として木炭の代わりにコークスを使って鉄鉱石を溶かす技術が開発され、鉄の大量生産が可能になった。マンフォードが「技術と文明」の中で「石炭と鉄の複合体から新しい一つの文明が発展した。」と述べている様に、ここに、世界は真に鉄器時代に突入したと言えよう。さらに、ワットの蒸気機関を利用してスティーヴンソンが蒸気機関車を発明するに及んで、熱源としての石炭を鉄道で大量に運ぶことが可能になった。しかし、当時の蒸気機関の性能では2%以上の勾配はのぼれなかった。また廃棄物を川に捨てていたため、おのずと工場の立地は石炭層とそれに続く川沿いに集中がちであった。

大規模工場を稼働させるためには大量の工場労働者が必要であり、労賃は上昇し、そのため大量の労働者が群をなして農村から都市へと流入し、人口集中が急激におこった。その結果、都市はひどい状態に陥った。L・ベネーヴォロは、「近代都市計画の起源」の中で「18世紀末にすでに100万人をようしていたロンドンには1841年には人口223万5000人を数えた。風景は一変した。」と述べている。中世でさえ町にごみを捨てれ

ば罰せられたが、今や都市のどこにでもごみは捨てられ、大量の労働者は劣悪な住宅で、中世よりはるかに悲惨な生活をしいられることとなった。（この点についてはエンゲルスの「イギリスにおける労働者階級の状態」に詳しく述べられている。）

都市のあり方を考える時、産業革命がもたらした最も重要な点は、職場と住居が空間的に分離されたということである。労働者はそれまでは家庭内での家内労働であったが、工業労働者となると一定時間工場で働き、時間が終われば帰宅する。しかも、同一の時間帯ということになるため、ここに大量の人々の通勤というこれまでには見られなかった新たな現象が発生することになった。そして、そのためには人々の移動を保障する交通という概念が決定的に重要になってくる。また、人間の生活時間は二分された。家の外で働く労働時間と家でくつろぐ余暇時間に。ここに、これまで家庭がもっていた機能が都市レベルに拡張し、都市は生産の場であるとともに労働者の生活の場となった。同時に、これまでの様に、家を中心にして近隣社会のコミュニティへ帰属しようとする意識が希薄になり、かわって家庭と職場への帰属意識が強く現れるようになった。

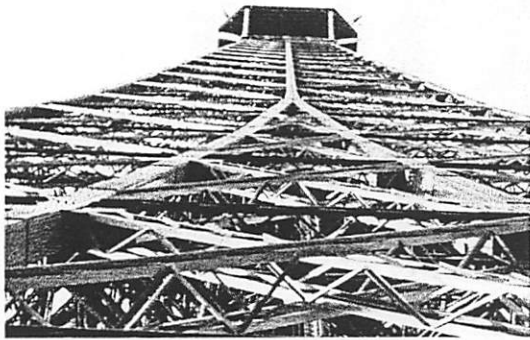
産業革命が都市にもたらした課題としては、①交通問題の発生、②工場配置の問題、③労働者の住宅の確保、④都市の衛生上の問題、の四つがあげられるが、これらの新たな都市問題の解決には、もはや中世都市の造形的手法では不可能であり、新たに都市をシステムとしてとらえ、機能的な解決をはかることが必要となってくる。これこそが都市計画（ユルバスムス）の始まりであるとともに社会政策の登場でもあった。都市計画という考えは、オースマンのパリにはまだなく「パリを整理する。」（宇田英男 「誰がパリをつくったか」）といった程度の考えであった様だが、無意識的であったにせよ、すでにその萌芽はみられる。

産業革命は鉱物資源という、これまでにない資源を使用して起こったエネルギー革命であり、それによる素材の変化は都市をこれまでの有機的な都市から無機質の都市に変えていった。中世都市を形成した土、石、木といった素材は段々と遠ざけられ、それに変わって鉄、コクリート、ガラスといった素材で都市は構成されることになった。鉄とコンクリートは住居の建築史上革命的な発明で、それにより6階以上の建築が可能となった。1900年代につくられた都市は、ほとんどが鉄とコンクリートを素材としている。そして、バロック都市においてはまだ都市の構成要素であった建築や街路も、次第に都市の単なるパーツと化し、都市そのものがそういった規格化された部品で組み立てられた巨大な一個の機械として登場してくる。

産業革命に伴う一連の技術の進歩は都市に様々な変化をもたらした。例えば、ロンドン

におけるガス灯の発明である。当時は霧のロンドンと言われるほど、空気が悪く、ガス灯が発明されなければスモッグで仕事を中断しなければいけないほどであった。ガス灯の発明によって照明というもの新たな都市のシンボルとなった。また、エレベーターの発明は都市を重層化することに成功し、高密度での居住を可能にした。エレベーターこそ垂直の交通機関であった。ギーディオンによると「ワットが鉄柱と鉄梁をもった7Fの木綿工場

(写真26)



- 1 鉄の芸術エッフェル塔 (1887~89建造)
- 2 日本の東京タワー (電波塔) に対し、エッフェル塔は文化の塔 (高さ300m)
- 3 シャイヨ宮からみたエッフェル塔 (最高に美しいポジション) まるで植物の様な軽やかさ。エッフェル塔は生きている

場を1801年に建ててから最初の鉄骨構造のスカイスクレーパーが出現するまでにほぼ80年の期間がかかった。」(S・ギーディオン「空間・時間・建築」) ということである。そして、1889年フランス革命百周年を記念してパリにおいて行われた万博の会場に、新しい素材としての鉄製構造物の白眉ともいわれる作品、”エッフェル塔”がギュスタブ・エッフェルの手によって完成をみる。当時は大建築家ブルデが360mの石の塔を提案したのに対して、一技術者エッフェルは300mの鉄の塔を提案し、結果はエッフェルが設計することになった。

ロラン・バルトの「エッフェル塔」は、バルトのエッフェル塔に対する限り無い愛情を名文で綴った作品であるが、その中で、エッフェルは鉄を使うことによって建築家から技師への移行を象徴していると、記している。まさに、石は大地から直接採りだされる材料であり、なにより不変性の象徴であるのにたいして、鉄は火の神話に参加しており、鉄の価値はエネルギーにある。バルトは、エッフェル塔が美しいのは、それが**必要から生まれた物**であるからであると考えていた。当時としては、まだ鉄という新素材に対する批判は根

強く、「工業都市」の著者トニー・ガルニエでさえ鉄の塔に反対する中で、エッフェル塔の誕生は、新しい物に果敢に挑戦しようとするフロンティア・スピリット

と鉄という新しい素材を十二分に活用しきった技術の勝利を象徴している。(写真26)

この様に18世紀末から19世紀にかけてイングランドに端を発した産業革命のインパクトは極めて大きく、かつての中世の時代、城壁の中でしみじみ生活できた空間であった都市は、今や巨大な交流の場として拡大の一途をたどり世界中と結び付くことになっていった。

さて、これまで産業革命の技術的側面が都市に与えた影響についてみてきたが、次に、その思想的な側面についてみてみたい。

近代都市の底辺に流れる思想上の巨魁はやはりコルビジェであろう。良くも悪くも思想的にはコルビジェの中に近代都市を考える際の基本的哲学があると思う。従って、近代都市を理解しようとするなら、まずコルビジェの考え方を学ばねばならない。

前に述べた様に、これまでの都市論は大まかに言えば中世都市に代表される”曲線”と近代都市の”直線”との相克であった。直線こそがすべての基盤であるとする思想の代表がコルビジェで、彼の著作の中には何度となく直線と幾何学に対する熱い思いが語られている。直線をこよなく愛好することは、直線で表現される人間の強い意思の力を高く評価するもので、それこそが近代合理主義精神の現れそのものである。

コルビジェは、ユルバニスムの中で「曲線の街路はロバの道、直線の街路は人間の道」という名文句をはいている。人間は目的を持っているために目的地に向かって無駄を排し、真っ直ぐに進む。一方、ロバは、無目的であちらこちらと無駄な動きが多い。従って、人間の方が、はるかに合理的な行動をし、ロバよりも高等であるという意味である。コルビジェは、生理的に直線好きであつたらしく、自ら「そのことは反論の余地のないこと」と述べている。さらに、生理的に心地よいと感じるだけでなく、都市の魂にとっても健康であると考えていた。しかも、直線は勝手につくり出されるものではなく、文化というものが何百年の努力を人間に求め達成してきたものである以上、「文化は直線の精神の状態である」とまで言い切っている。この様な考えからニューヨーク、ワシントンに代表されるグリッドパターンの都市形態を自ら礼賛し、アメリカの直線的な都市を賛嘆をもって見る勇気を人々は持つべきだと説く一方、現在の都市の多くが幾何学的でないため死にかけていると嘆いている。

彼は、幾何学は建築の本質そのものであり、都市建設に大量生産システムを導入するためには、工業化しなければならない、と考え、幾何学にそつてのみ人間は人間的な良い仕事をする、と断言している。従って、街路も仕事の街路は直線であり、曲がった街路は休息の街路（同時に絵画的）であるとされた。

コルビジェにとって幾何学は、自然の秩序の反映であつた。それは透明で乾燥した自然

の中に、秩序と調和の美をみいだしたギリシャ人の物の見方と同一である。彼自身、アテネのパルテノン神殿を「建築の決定的瞬間であり空前絶後のもの」（建築をめざして）と述べ、建築物で世界的にみてこれに比肩するものはないと絶賛している。（写真27）

アテネにあったプラトンのアカデミアの門には「幾何を学ばざる者この門に入るべからず」と記されていたと言われ、当時は幾何学を論理と美の完全なる結合であり神聖なものであるととらえていた。

ミトレスはじめギリシャの各都市国家においても、街並みは直交するグリッドパターン状のものが多く、「古代のオスマン」と異名をとる史上最初

の都市計画家と言われるヒッポダモスの手になるものがほとんどであるが、これらはヒッポダモス式と呼ばれ、典型的な直角交状の街割を特徴としていた。この方式は、ギリシャのものがヒューマンスケールであるのに対しローマのものはスケールが大きいなどの差異はあるが、基本的にはローマタウンに引き継がれ、ローマの侵攻により、一時的にローマの植民地となったかどうかは、このグリッドパターンの街並みの有無が一応の目安になるほどである。（別添図2参照）



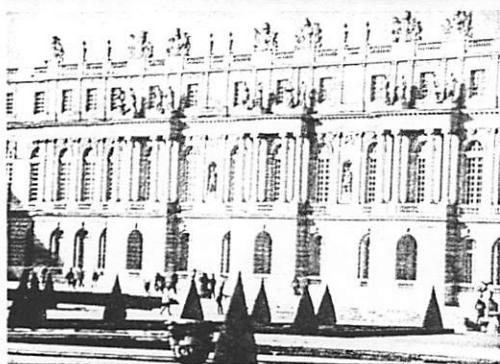
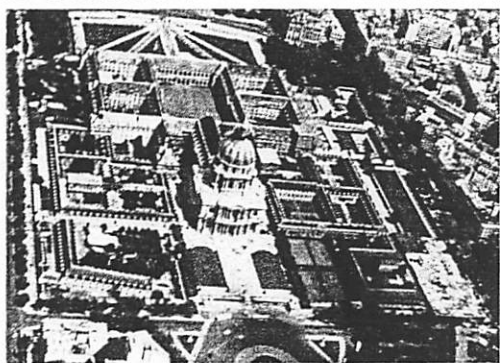
西洋建築の最高傑作 アテネのパルテノン神殿

絵画の分野で初めて風景の中に直線をもち込んだのはセザンヌであった。彼は直線の持つ意味の大きさと同時にその暴力性をしっかり見据え、風景画の中に、あえてそれを持ち込もうとした画家であった。

直線というものは正方形、円と並んで造形の基本形態で、ギリシャ建築は正方形と円を基準につくられていると言われる。ギリシャにおいては様々な比率が持ち込まれたが、その場合の基準は、人間の体の寸法であった。コルビジェは、この考えを復活させた。彼は建築を比例と考え、寸法を測ることが秩序をもたらすと考えていた。従って比例を仕事の基準として人間のサイズをモジュールとした。それが大量生産の規格となり、現代の規格大量生産の思想的原点となったと言えよう。彼のこのような幾何学礼賛の考え方は、その延長線上に機械にたいする強い信奉である機械主義を生み出すことになる。なぜなら、機械は幾何学によって成り立っているからである。彼は、「今日の装飾芸術」の中で「装飾の時代は死んだ。機械の時代が生まれた。」と語り、機械の時代の到来を予告している。

最も合理的で無駄のない直線をこの上なく愛するコルビジェにしてみればゴテゴテと飾った装飾は最もいみ嫌うものであったのだろう。彼の考え方によれば、色々な装飾をそぎ落とし削除した結果残る単純さ、すなわち節約の結果残る単純さこそが、複雑さ、豊かさ、

(写真28)



バロックの特色である権力者の明快な意思がはっきりみられる傑作

1 パリのヴァンドーム広場 (ルイ14世の栄光をたたえるための記念広場。マンサール設計)

2 アンヴァリッド (ルイ14世が戦傷者の収容施設として建設)

3 ベルサイユ宮殿 (フーケのヴォー・ル・ヴィコントに対抗してルイ14世が作らせた宮殿。そうそうたる顔ぶれが建設に参画。ル・ヴォー、ル・ブラン、ル・ノートル、マンサールなど)

ど認識していた。しかし、近代に入り、神に代わり科学が登場すると、徐々に人間は人間の知恵と知識、その無限の可能性に自信を持ち始め、ついには、「神は死んだ。」と豪語するほど傲慢になっていった。コルビジェの異常なまでの直線好みは、直線の持つ単純さ、明快さ、強さ、暴力性などへの強いあこがれであり、意志の強い人間（えてして権力者はそうだが）へのあこがれ、評価を意味している。

従って、絶対権力の下でのバロック時代の作品に限り無い賞賛の念を抱き、特にヴァン

その他もろもろが複合した総括の結果であり、凝集なのである。その結果が「偉大な芸術は単純である。」というまさにコルビジェらしい飾らないシンプルなテーゼとなって現れる。ここにコルビジェの真髓がある。それは同時に、最も機能的なものは美しいということでもある。

究極の機能を追求することは人間にとって最も使いやすくデザインングをするということの意味している。例えば道具をとってみれば、最も使いやすい道具とは使い手である人間にとって体の一部として使える道具であり、人間の体の諸機能の延長線に位置する。人間に信をおけば、人間の機能の一部である道具はそれが美しくないはずがないと考えるわけである。人間も自然の一部であり自然から生まれたものである以上、自然の秩序とリズムは同時に人間の持つ秩序とリズムであり、生産される道具も同時にそういった秩序とリズムを持つ必要がある。それこそが恐らくコルビジェが求めたものなのではないだろうか。としても、彼自身の内部に大きな矛盾を抱えている。それは以上の点を真に実現するためには実は最も重要な点は、人間が自らの弱さを十分自覚し、自然の声に素直に耳を傾ける謙虚さを持つことが不可欠であるということである。なぜなら、人間の強すぎる意思は自然との同化を妨げ、対立しかよばないからである。幸いにも中世には自然をねじふせるだけの科学も技術もなく、人間は自然現象に恐れおののき、神の前にただひれ伏すだけの弱い存在であり、人々はそのことを十分すぎるほ

ドーム広場、アンヴァリッド、ベルサイユなどを高く評価している。いずれもフランスにあり、支配者の意図が明確に出ている作品ばかりである。(写真28) コルビジェは、こよなくパリを愛したと言われるが、彼がなぜパリ好きであったか、容易に理解できよう。(一方、曲線派代表とも言えるカミロ・ジッテは、「直線は何の興奮もよばない。」と述べている。(おそらく、最も「ロバの道」で構成された街は、ヴェネチアであろう。ヴェネチアの魅力、それはラヴァリンスにあると思う。)

当時は、飛行機がまだ現代ほど普及しておらず、珍しい乗り物であったが、南米で飛行機にのる機会を得たコルビジェは、機上から宇宙的ともいふべき光景を眺め、ラプラタ川の蛇行をみてロバの道を思い、人間の手を加え改造してみたいという欲望にかられたと言われている。同時期に実際のパイロットであり小説家であったサン・テクジュペリは、その著「夜間飛行」の中で、主人公に次の様に言わせている。「夜が見せているあの呼びかけ、あの灯、あの不安、あれが人間の生活だと知るのだった。影の中の一つの星、あれは離れ家だ。星の一つが消えた。あれは愛の上にとざされる一軒の家だ。」

テクジュペリは名文家であり、彼の見方にはパイロットと地上の人間との相互の感情の交流がある。一方、コルビジェの場合は、一方的に強い意志でもって相手をねじ伏せ、従わせたいという強い欲求がある。

筆者も同様の体験をしたことがある。城壁の調査のためヨーロッパへ行ったその帰路、寝付かれず航空機の窓から闇に沈むシベリア大地をなにげなくみつめていると、一つの光がポツリとみえた。その時、妙に感動を覚えたことを今でもよく覚えている。まるで満天下の暗闇の中でたった一つ輝く星のようで、その光に人間の息づかいを感じた。こんなところにも人間の生活があるのかと思うと言ひしれぬ思いがこみあげてきた。少し行くと、今度は白い蛇の様に、ぼんやりと光ったものが見えてきた。おそらく凍りついたシベリアの川の蛇行であろう。さらに進み、今度は直線状に伸びた白い棒の様なものを見た時、感動は頂点に達した。それは凍りついた道路であることが容易に想像できるのだが、その時、人間の意思が自然の中に残した巨大な足跡に大きく心をゆさぶられた。広大なシベリアのツンドラ大地を切り拓き、開発を進めてきた人間の証そのものをはっきりとこの目で見た。まさに、ガウディが言う様に自然には決して直線はありえず、もし、あるとすればそれは人間の意思の現われなのである。

ユニークな都市論で知られる東秀紀は、その著「荷風とル・コルビジェのパリ」の中で、コルビジェも晩年は中世的なものを評価し、荷風と同方向に傾斜していったとし、コルビジェの建築、都市計画は中世的世界への憧れと機械文明賛者との矛盾の間に存在している、

と述べている。筆者にはコルビジェが本当に荷風の方向性（それは筆者の見解ではヨーロッパで言えば中世都市的、我が国でいえば古き良き時代の浅草、谷中などの景観、雰囲気の評価する、いわゆる”しみじみ都市論”であるが）へ傾斜していったかどうかは分からない。

マンフォードの指摘の様に、コルビジェに欠落していたのは、都市の物理的構造のみに目を向け、都市の本質である社会的側面に言及していないことで、それが彼自身のいう装飾を排した結果の単純さということなのかどうか、それは不明である。いずれにせよ近代都市の根底に流れる思想の原型を形づくるコルビジェの思想に対する理解なくして近・現代都市は語れず、またそれを乗り越えない限り、21世紀の都市の展望も拓けないことだけは確かに言えることであろう。

（注 なお、名古屋の街づくりについては、第2部で詳細に論じる予定であるが、筆者は、もしコルビジェが生きていたなら、名古屋の都市計画を絶賛するであろうと考えている。

名古屋の街割は、江戸の慶長年間に徳川家康が行った都市計画をベースにしており、戦後の復興計画を経て今日にいたっているが、名古屋城にみられる直角直交の城づくりに端を発し、中心市街地のグリッドパターンはじめ典型的な直線主体の機能的な街づくりであり、そのことが機能的、経済的ではあるが、都市がもつ陰影に欠ける魅力の少ない街といわれ、個性と魅力のある街づくりが今後必要であるといわれる最大の理由となっている。）（別添図3参照）

まとめ

これまで都市とは何かについて、古代都市から近代都市にいたるまで都市の源流をたどり、都市の本質について論じてきた。その結果、都市とは、その語が示すとおり政治・宗教・文化・軍事・経済など都（みやこ）にまつわる中枢管理機能と市（いち）に由来する、物・人・かね・情報といったものが交流する結節機能、この二つをもつ高密度な集住空間ということができる。結局、都市とはそういうものだが、都市形成のプロセスにおいて、都市政策上参考になる視点を数点とりあげておきたい。

第1点は、都市は情報センターであるという点である。

元来、情報が集まるところに、人が集まり都市が形成されていった。そして、都市が拡大するにつれ情報機能がさらに強化され、ついに情報センターになった。情報の本質の一つに情報のマタイ効果と呼ばれるものがある。（マタイ25章29節「それ、誰にても持

てる人は与えられ、いよいよ豊かにならん。」) マタイ効果とは、集まるところにはさらに集まり雪だるま式に大きくなっていくというものである。つまり、情報の集まる所人が集まり、人が集まる所に情報が集まる。このプロセスを繰り返し、都市は巨大化していくということである。(情報と都市に関しては、「社会と情報」1997.3発行、(株)東信堂「地方自治体における政策と情報」筆者著、参照)

どのような情報が人々の生活にとって重要であるかはその時代によってことなる。たとえば、古代においては宗教が最も重要であり、最初は神官が人々の尊敬を集め、「神殿」が都市の中心であり、情報の核であった。また、中世においては、商業のウエイトが高く、商取引に付随する各種の情報がきわめて大切であった。18世紀の絶対王制下においては経済、文化、軍事などすべての情報が首都に集中した。さらに、近年では、メディア情報がベルリンの壁を崩壊させ、東西冷戦を終結させたことは記憶にあたらしい。また、マルチメディア時代の到来により、インターネットの世界的な普及がマスメディアに対抗する新しいパーソナルメディアを登場させ、あらたな秩序形成に向け動きはじめている。

このように、何がその時代が求める情報であるかを十分認識することが都市政策上極めて重要であり、情報を的確に把握し、発信できない都市は現代においては都市間競争の中で埋没をまぬがれえない。都市は常に情報を受け取るとともに発信し、そして、情報をたえずつくりだす。都市こそ都市が生み出す情報の生産の場であり、そのためには、多様な価値観をもった多くの人達が集まり、交流し、議論し、様々な企画を実行する、そういった人々の自由な往来が保証されていなければならない。都市は、田舎と異なり、様々な価値観、考え方をを持った人々が集うカオスの場であり、攪拌装置なのである。羽仁五郎は、「都市の論理」の中で、都市の本質を「自由な交通、それを第一歩として自身の自由及びあらゆる種類の自由の発展」と定義付けているが、都市とはまさにアジールであり情報の生産・交流の場なのである。時代が最も必要とする情報を得た者が時代の変革者となれることを十分認識し、政策を立案すべきであろう。

第二点は、都市は定住の場であるとともに交流の場であるということである。都市の交流度は時代が進むにつれ、また交通手段の技術革新が進むほど活発化してくる。特に産業革命以降、労働の場と生活の場が分離して以来、交通が活発化し、今や世界的規模で交流が進展しつつある。この点については、第2部で詳しく議論したい。

第三点は、市民により形成された都市は美しいという点である。バロック都市も十分美しいという批判もあろうが、南ドイツの諸都市に見られるコンパクトな美しさの中には、バロック都市の様に壮大でもないし、威厳があるわけでもないが、私達の心を豊かに導い

てくれるほのぼのとした暖かさがある。こういった、中世ドイツの諸都市の美しさの鍵は、市民と市民社会にある様に思われる。（市民社会と市民意識については第2部で詳しく論じる）

以上、三点について述べたが、都市形成の歴史をみてみると、古代においては数少ない巨大都市国家があり、古典古代のギリシャではポリスというユニークな形態があらわれ、中世では小規模の市民都市が数多く点在し、バロック、近代になり首都を中心に、それらがヒエラルヒーを形成する。現代においては、本稿ではふれなかったが、都市はさらに外延化し、拡大を続け、ゴッドマンが指摘する様に、メガロポリスからエキュメノポリスへと都市の区域がアメンバー状に拡大を続けれんたんしていく。一方、これまでの旧市街では空洞化がおこり、スラム化していくという現象が現われる。どこまでが都市か境界が不明瞭になり都市は「見えない都市」になっていく。（都市化と呼ぶか、郊外化と呼ぶか）

ドクシアデスは、「新しい都市の未来像」の中で、過去の都市の特徴を静態的都市とし、それに対し現代の都市は動態的都市であり、過去の価値尺度はもはやあてはめることができないと述べている。現代都市は巨大なリバイアサンとして私達人間の前に大きく立ちまわっている。果たして、人間がこの巨大な怪物を計画と規制という武器でコントロールできるのだろうか。すでに計画論は破綻したという意見もある。都市を人間の様に有機体としてみ、全体としてコントロールするのではなく、くさびを打ち込み誘導する。そうすれば有機体である以上、調整機能が働き、自己回復をはかるだろうという有機的都市論を唱える学者もいる。いずれにせよ、私達は過去を振り返り、懐かしがるのではなく、過去から学びそれを現代の都市問題解決に役立てていかなければならない。

では、私達は都市の源流を訪ねる旅の中からもなにを学ぶべきであろうか。三点について述べたが最後に歴史の意味についてふれておきたい。

本論中でも述べた様に、これまでの都市を概括してみると、大まかに「直線対曲線」という構図が浮かび上がってくる。古代都市から近代都市にいたる各都市の中で、国家権力の強い時代ほど都市の造形は直線を主体に構成されてきたといってもいい。それは同時に人間（この場合は権力者）の強い意思の表現である。その中で、唯一ヨーロッパ中世都市のみが曲線主体に構成されている。紀元前数千年もの昔、ジクラットを中心としたバビロニアの壮大な都市やローマの古典古代都市の壮大さに比べれば、歴史を逆転したかの様な小規模な都市が中世には登場した。そして、近世、近代と時代が下るにつれ、古代とは異

なる形で再び直線主体の都市が登場してくる。

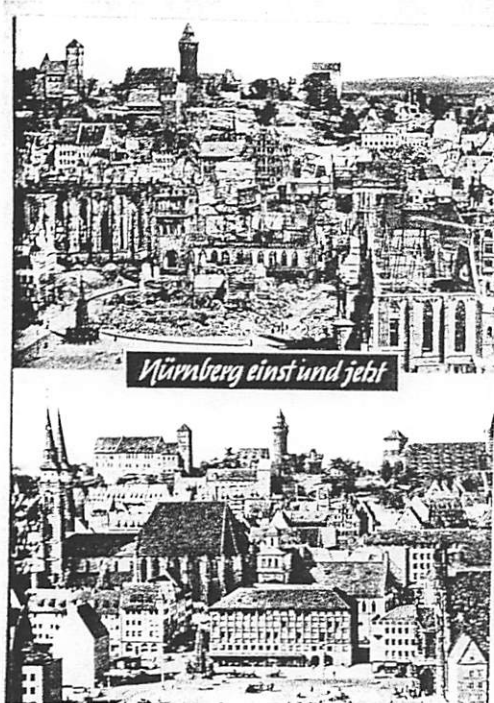
なぜ、中世都市は曲線主体であったのか。中世都市こそは、一人の権力者によってつくられた都市ではなく、多くの市民の手によってつくられた史上最初にして最後の都市であり、ここに私達は都市というもののイデアルタイプ（理想型）を見ることができる。都市というものはその都市に住む市民一人ひとりが自らの都市に「誇りと愛着」を持つ時、真の「輝ける都市」になる。この点こそコルビジェの「輝ける都市」に決定的に欠落していた点である。自分が住む街を自慢に思い、誇りに思えなくて都市は良くなるはずがない。現代でも南ドイツを中心とした諸都市を旅するとそのことに気づかされることが多い。ドイツ在住が長い子安美知子は、アウグスブルクでは市民は今でも帝国都市であったことを誇りに思い、人口ではミュンヘンより小都市でも都市格では上であるという意識を持ち、どこかきどっていると言っている。

また、ハンブルクでは今でも自動車のナンバーはHH（つまりハンザ同盟都市ハンブルク）と聞いている。確かにこれらの都市にみられる市民の自分の街に対するこだわりと愛着は日本の都市民よりはるかに強い。しかし、果たして、都市の成立から800年近くたった今日まで、中世都市の市民意識が続いていると考えられるのだろうか。筆者は、都市壁こそが市民社会をつくり市民意識を形成してきたと考えているが、例えばカールスルーエの様に都市壁のない都市はどう考えるのか、いまだ疑問は残る。しかし、どうも都市が可視的であり、しかも都市核を明確に持つことがこの問いに対するヒントである様に思えてならない。それは、ジョリスが「都市の中心性」と呼び、エネンが「空間統合機能」と呼んだものを視覚化したものであろう。

私達が具体的に制御できイメージできるのは地域であって、国家ではない。国家こそは共同の幻想であり、実体があるのは地域である。マンフォードの初期の著作の中に「ユートピアの系譜」という作品があるが、彼はその中でプラトン以来の数々のユートピア論を論評し、最後に近代科学のゆく末に懸念を表明しつつ、玩具の科学から機具の科学になるべきであることを説いている。そして、科学は特殊な地域社会とその社会が求めている問題に再び焦点をあてるべきであり、地域を調査することによって獲得される知識こそが簡潔性と首尾一貫性を持つ真に総合的な知識であると主張している。このマンフォードの思想は、彼が師と仰ぐパトリック・ゲデスの現地調査重視の考え方の影響を強く受けるとともに、その後のマンフォードの一連の都市論のベースとなる思想の萌芽となるもので、地域こそがベースであるという彼の強い信念に裏付けられている。そういった観点からヨーロッパ中世都市を見てみると、それは可視的であるがゆえに実体的である。しかも、どこ

の都市にも歴史博物館があり、その土地の人達は自信を持って私達に行くように勧めてくれる。実際行ってみるとそれ程とは思わないが、その割には外国の観光客も多いのには驚く。そこには、たいてい中世都市の模型があつたり、リトグラフがある。子供達は小さい時から自分達の町の歴史を学び、自分達の町がいかに素晴らしいかを教えられる。大人

(写真29)



市民の努力により爆撃前と寸分変わらずに再建されたニュールンベルク
上 かつてのニュールンベルク
下 現在のニュールンベルク

達が誇りと愛着を持ち、自信を持って自分達の子供や孫に自分の町がいかに素晴らしいかを伝えることができるようであれば子供達が自分の町に誇りを持てるはずがない。

明治32年に書かれた幸田露伴の「一国の首都」には、都市を思いやるやるせないほどの情熱がしるされ胸をうつ。この書は「一国の首都は例えば一人の頭部の如し」という有名な言葉で始まるが、国民としてその首都を愛せざるは人としておのれの頭を愛さないのと同じだとして、昨今の東京人の都に対する愛情のなさを、露伴は嘆いている。彼は「往時のいわゆる江戸児が江戸を愛したる如き燃ゆるが如き意気熱情を以て、今の市民は我が東京を愛せざるや」と述べ、今一度、東京市民が燃ゆるが如き熱情で持って帝都東京を愛すべしと熱く語っている。我が国においては自らの住む街に対する誇り、愛着が徐々に稀薄になっていくのに対し、ヨーロッパ諸都市にお

いては市民の都市に対する愛着は依然として強いものを感じる。増田四郎はヨーロッパ諸都市を訪れると「そこがそれぞれの世界で一番よい町だと誇る多くの市民に出くわす」と語っている。

カミロ・ジッテは、ニュールンベルクを中心としたドイツを何度も訪ねることを推奨している。リヒアルト・ワーグナーが最も美しい街と絶賛し、ヒットラーがこよなく愛した最もゲルマン的造形をたたえる街、ニュールンベルクは、第二次世界大戦で徹底的に破壊され旧市街地の90%は灰じんに帰した。にもかかわらず、戦後の復興は住民投票の結果、ヘルムート・ヤンの改造案を退け、戦前のニュールンベルクに戻すことに決定し、市民一人ひとりががれきを積み、破壊前と寸分たがわぬ形で再建がなされている。(写真29) しかも、古い建物を残すだけでなく、うまく利用しながら近代建築をたくみに取り込む努力をしており、この古いものと新しいものとの調和はニュールンベルクのみならず、フラ

ンクフルトはじめ、ドイツの諸都市にみられる。(写真30)

この様に、ヨーロッパ中世都市を経験し、そこから今日の都市を形づくっているところの市民は、歴史に対するこだわりが強い。

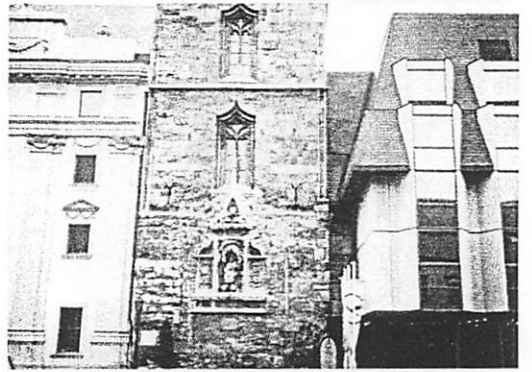
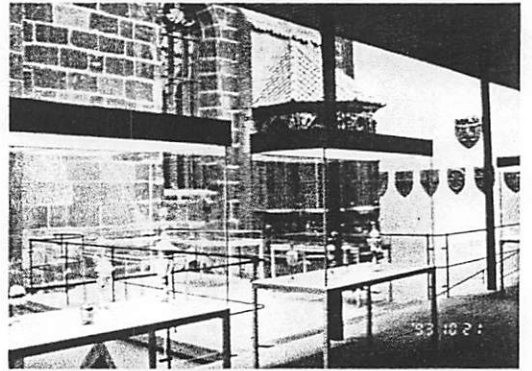
私達は、都市と人間にとっての歴史の意味を今一度再点検する必要がある。

都市は歴史を写し出す鏡である。歴史のない都市は思い出のない人間の様なものである。山田太一氏の作品に「岸辺のアルバム」というのがあるが、このドラマは人生にとって何が大切かを私達に教えてくれる。

人は年輪を積み重ねることによって今日があるのと同様、都市も過去の歴史の蓄積によって今日の姿がある。都市はその歴史を重層的におい今日の姿があるのである。かつてシラク大統領がある人にパリの人口を尋ねられた時、数億人と答えたことがあった。なぜかという、パリは岩盤の上であり、その岩盤を掘り、そこを墓にしながら、切り出した石を上積みしてできた都市である。従って、パリは重層的、立体的にできており、パリの人口は過去の人達をも含むという気持ちがあるからである。(写真31)

1982年に放映されたりドリー・スコット監督の作品にブレッドランナーというのがある。これはよく未来都市のイメージとして都市論でも引用される映画

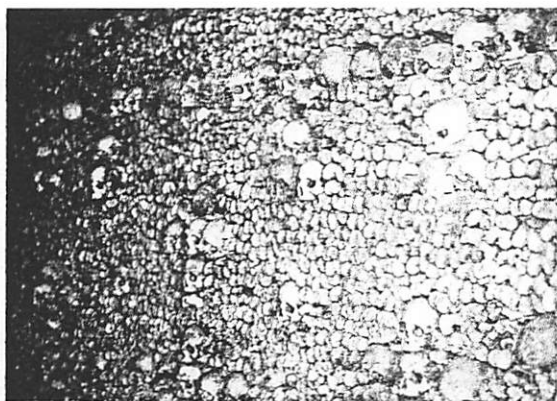
だが、この映画の本質は実は記憶という点にある。人間そっくりに作られたレプリカント(人造人間)が登場するが、いくら技術が進んでも唯一模倣できない点が成長の記憶なのである。人間は生まれてから今日にいたるまで一人ひとり異なる記憶の集積として今日の自分がある。都市も同じことで歴史という都市の記憶こそ、その都市のアイデンティティを形成する核となるものである。都市プランナーとしては都市のアルバム作り、すなわち街の歴史的遺産を掘り起こし、関連づけて整理し、だれの目にも触れることができる様に視覚



古いものと新しいもの見事な調和

- 1 フランクフルトの都心の組み込まれた市立現代美術館 (ここには河原温氏のコーナーがある)
- 2 ニュールンベルクのゲルマニウム国立博物館 (古い建物をうまく取り込んだ近代的建物)
- 3 ブタペストのヒルトンホテル (古い教会を取り込んだ記念碑的作品)

(写真 3 1)



パリのカタコンブ（地下墓地）岩盤を掘って墓場に。
1785年から採石場の空洞を無縁仏の納骨所として使用。数百万体の遺骨が眠る。

ヨーロッパの街づくりの根底に脈々と流れ、受け継がれている精神こそ私達は学ばねばならない。そこにこそ真に豊かな市民生活を実現できる鍵があるからである。

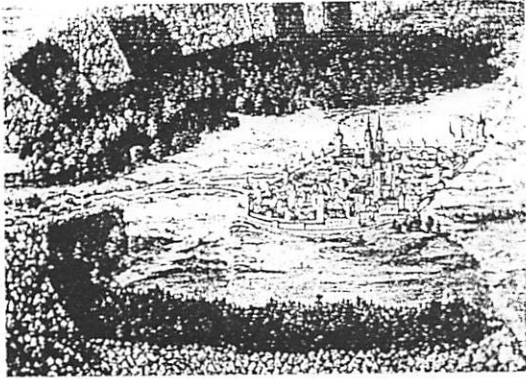
最後に、都市における歴史の意味を最も的確に表現していると筆者が考えるルイス・マンフォードとケビン・リンチの名言を引用して第1部を終わりたい。

- ・ルイス・マンフォード「都市の主要な役割は、変化のただ中であっても、豊かで多様な文化をもった過去との眼にみえる構造上のつながりを維持することによって未来を豊かにしていくという役割である。」
- ・ケビン・リンチ「だれのために過去が維持されているかを知らねばならない。変化を運営し、現在の目的のために過去の遺産を積極的に活用することは、神聖不可侵な過去に対する硬直した崇拜よりもはるかに好ましい。私達は過去を選択し、変化させ、現在の中で過去をつくる出していかななくてはならない。過去を選択することは未来の建設を促進することでもある。」

第2部では、第1部を基礎として、現代の大都市における課題を整理し、課題解決に向けた具体的政策を提示したい。

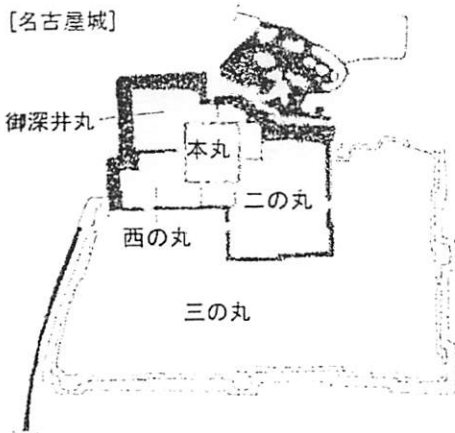
化し、人々の心の中に良き思い出をつくることが大切である。まさに、都市の中の遺伝情報に着目し、歴史を目に見えるものにするのが大切なのである。サルトルがアメリカの町を評して「砂漠のテント」と言ったそうだが、戦後のアメリカナイゼーションの中でアメリカ型の開発手法が大いに参考にされている。しかし今日、私達が学ぶべきは手法ではなく、ヨーロッパの精神ではないだろうか。企業の視点、産業の視点から生活者の視点へと街づくりの視点が移りつつある今日、都市の原点に立ち返り、ヨーロ

(図1)



ヨーロッパ中世の深い森を切り開いてつくった都市 (1516年のニュールンベルク)

(図2) 直線の城と曲線の城



名古屋城



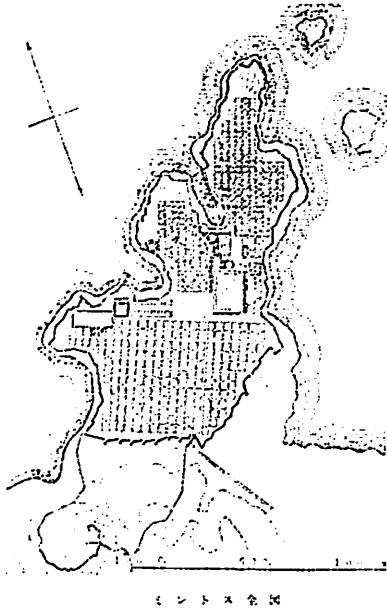
姫路城



江戸城

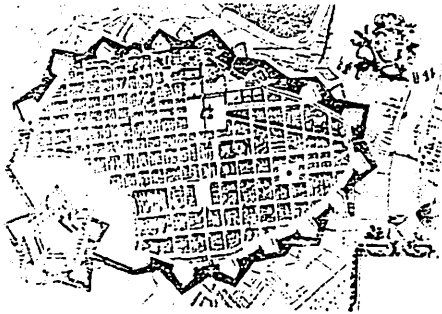
(図 3)

1 ヒッポダモス式都市

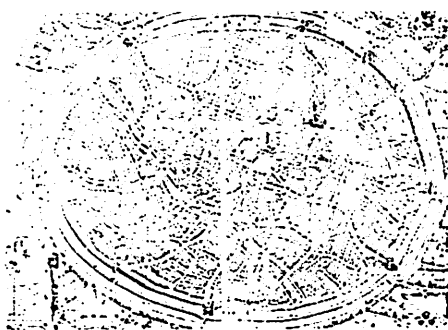


ギリシャのミレトス

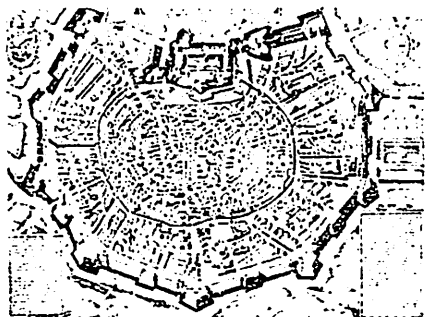
2 中世都市の形態比較



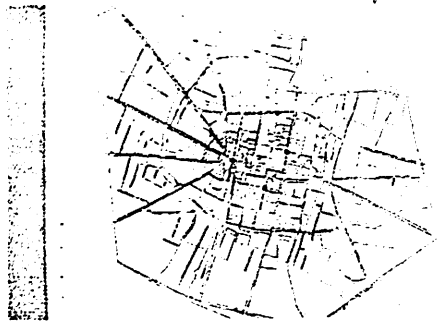
ローマの影響が強く現れているトリノの町（典型的なグリッドパターン型）



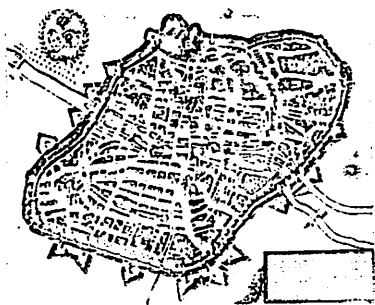
典型的な中世の「ロバの道」がみられるブルージュの町



スフォルツァ城を中心として環状に展開しているミラノの町

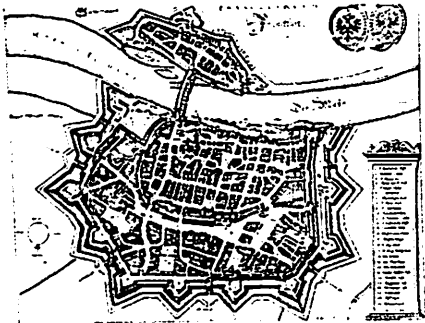


中心部はローマの影響が見られグリッドパターン型。
中心からの4本の直線道路がみられるボローニャの町



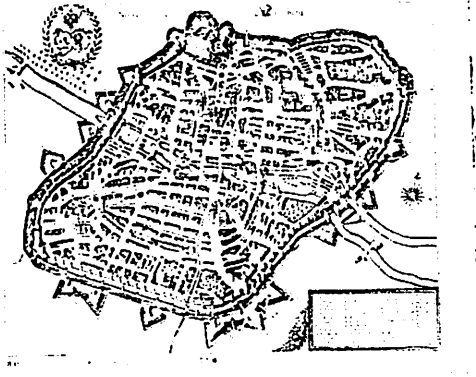
川をはさんだ2つの地区が合体してできた町

- 1 ニューンベルクの町
- 2 フランクフルトの町



アウグスブルクの町

3 中世都市と現代の比較



都市の骨格はほとんど同じ

(注) なお、本稿において使用した写真は、筆者が撮影したものである。ただしケルン大聖堂、アンヴァリッド、ヴァンドーム広場、ニュールンベルク（モノ写真）の4点については市販のスライドを使用した。また図については主にヴェネーボロ、サールマンなどの著書から転写した。

主な参考文献

本文中引用したり、参考にした文献について主なものを次に掲載する。

1. 古代都市

- (1) フェステル・ド・クーランジュ「古代都市」 (田辺貞之助訳、白水社、1996年)
- (2) ピエール・グリマル「ローマの古代都市」 (北野徹訳、白水社、1995年)
- (3) クリストファー・ヒバート「ローマ～ある都市の伝記～」
(横山徳爾訳、朝日選書、1991年)
- (4) リース・カーペンター「パルティノンの建築家達」
(松島道也訳、鹿島出版会、1977年)
- (5) ウィッチャーリー「ギリシャ都市はどうしてつくられたか」
(小林文次訳、みすず書房、1962年)
- (6) アンドレ・パロ「聖書の考古学」
(波木居斉二・矢島文夫訳、みすず書房、1958年)
- (7) E・J・オーウェンズ「古代ギリシャ・ローマの都市」
(松原国師訳、国文社、1992年)
- (8) カエサル「ガリア戦記」 (近山金次訳、岩波文庫、1989年)
- (9) タキトゥス「ゲルマーニア」 (泉井久之助訳、岩波文庫、1992年)
- (10) V・ゴードン・チャイルド「歴史のあけぼの」
(今来陸郎・武藤潔訳、岩波書店、1958年)
- (11) // 「歴史とは何か」 (ねずまさし訳、平凡社、1960年)
- (12) // 「文明の起源」 (上・下)
(ねずまさし訳、岩波新書、1968年)
- (13) 伊東俊太郎「都市と古代文明の成立」 (講談社、1979年)
- (14) 青柳正規「皇帝たちの都ローマ」 (中公新書、1992年)
- (15) 弓削達「ローマはなぜ滅んだか」 (講談社現代新書、1989年)
- (16) 藤原武「ローマの道の物語」 (原書房、1988年)
- (17) 太田秀通「スパルタとアテネ～古典古代のポリス社会」 (岩波新書、1970年)

2. 中世都市

- (1) アンリ・ピレンヌ「西洋中世都市発達史」 (今来陸郎訳、白揚社、1942年)
- (2) ハンス・プラーニッツ「中世都市成立論」 (鯖田豊之訳、未来社、1977年)
- (3) フリッツ・レーリヒ「中世ヨーロッパ都市と市民文化」
(魚住昌良・小倉欣一訳、創文社、1978年)
- (4) エディト・エネン「ヨーロッパの中世都市」
(佐々木勝巳訳、岩波書店、1987年)
- (5) アンドレ・ジョリス「西欧中世都市の世界～ベルギー都市ウイの栄光と衰退～」
(斉藤綱子、八塑社、1995年)
- (6) ハイน์リヒ・ピレヒテヤ「中世への旅・都市と庶民」
(関南生訳、白水社、1982年)
- (7) ニコラ・オットカール「中世の都市コムーネ」
(清水廣一郎・佐藤真典訳、創文社、1972年)
- (8) ドナルド・マシュー「中世のヨーロッパ」 (梅津尚志訳、朝倉書店、1987年)
- (9) ホイジンガー「中世の秋」(上・下) (堀越孝一訳、中公文庫、1987年)
- (10) ハワード・サールマン「中世都市」 (福川松一訳、井上書院、1983年)
- (11) 阿部謹也「中世の窓から」 (朝日新聞社、1986年)
- (12) // 「甦る中世ヨーロッパ」 (日本エディタースクール出版部、1991年)
- (13) // 「中世の星の下で」 (ちくま文庫、1990年)
- (14) 瀬原義生「ヨーロッパ中世都市の起源と支配権力」
(歴史学研究、青木書店、1979年)
- (15) 前川道郎「ゴシックということ」 (学芸出版社、1992年)
- (16) 野崎直治「ヨーロッパ中世史」 (有斐閣選書、1992年)
- (17) // 「ヨーロッパ中世の城」 (中公新書、1989年)
- (18) 河原温「中世ヨーロッパの都市世界」 (山川出版社、1996年)
- (19) 土井正興「ヨーロッパ中世の民衆と蜂起」 (三省堂、1982年)
- (20) 鈴木成高「中世の町～風景～」 (東海大学出版会、1982年)
- (21) ジャン・ジャンペル「中世の産業革命」 (坂本賢三訳、岩波書店、1978年)
- (22) リン・ホワイト・ジュニア「中世の技術と社会変動」
(内田星美訳、思索社、1985年)

- (23) 清水廣一郎「中世イタリアの都市と商人」 (洋泉社、1989年)
- (24) 増田四郎「ヨーロッパ中世の社会史」 (岩波書店、1985年)
- (25) 鯖田豊之「ヨーロッパ封建都市」 (講談社学術文庫、1994年)
- (26) 醍醐嘉美と怪兵隊「幻想都市物語 (中世編)」 (新紀元社、1989年)
- (27) 魚住昌良「ドイツの古都と古城」 (山川出版社、1991年)
- (28) 堀田善衛「路上の人」 (新潮社、1985年)
- (29) 井塚正義「庶民の世紀～中世の技術革命～」 (朝日ソノラマ、1981年)
- (30) 椽川一朗「ドイツの都市と農村」 (吉川弘文館、1989年)
- (31) 坂井栄八郎「ドイツ歴史の旅」 (朝日新聞社、1986年)
- (32) 馬杉宗夫「大聖堂のコスモロジー」 (講談社、1992年)
- (33) ジャン・ジャンペル「カテドラルを建てた人々」
(飯田喜四郎訳、鹿島出版会、1969年)

3. ルネッサンス・バロック都市

- (1) ブルクハルト「イタリアルネッサンスの文化」
(柴田治三郎、中央公論社、1967年)
- (2) モンタネッリ・ジェルヴァーゾ「ルネッサンスの歴史」
(藤沢道郎訳、中公文庫、1985年)
- (3) ジェウリオ・C・アルガン「ルネッサンス都市」
(堀池秀人監訳・中村研一訳、井上書院、1983年)
- (4) 高階秀爾「ルネッサンスの光と闇」 (中央文庫、1987年)
- (5) 林達夫「文芸復興」 (中公文庫、1981年)
- (6) 樺山紘一「ルネッサンス周航」 (福武文庫、1987年)
- (7) 会田雄二・中村賢二郎「ルネッサンス」 (河出書房新社、1989年)
- (8) 中嶋和郎「ルネッサンス理想都市」 (講談社選書メチエ、1996年)
- (9) ヴァザーリ「ルネッサンス彫刻家・建築家列伝」
(森田義之監訳、白水社、1989年)
- (10) 陳内秀信「都市のルネッサンス」 (中公新書、1978年)
- (11) ロマン・ロラン「ミケランジェロの生涯」
(高田博厚訳、岩波文庫、1990年)

- (12) 辻邦生「春の戴冠」 (新潮社、1977年)
 (13) 石鍋真澄「ベルニーニ～バロック美術の巨星」 (吉川弘文館、1985年)
 (14) 湯沢正信「劇的な空間～栄光のイタリアバロック～」 (丸善株式会社、1989年)

4. 近代都市

- (1) ドーラ・ウィーベンソン「工業都市の誕生～トニー・ガルニエとユートピア～」
 (松本篤訳、井上書院、1983年)
 (2) クラレンス・ペリー「近隣住区論」 (倉田和四生訳、鹿島出版会、1989年)
 (3) 杉本俊多「バウハウス」 (鹿島出版会、1979年)
 (4) 吉田綱市「トニー・ガルニエ」 (鹿島出版会、1993年)
 (5) 利光功「バウハウス」 (美術出版社、1992年)
 (6) ギリアン・ネイラー「バウハウス」 (利光功訳、パルコ出版、1989年)
 (7) L・ライスマン「新しい都市理論～工業社会の都市過程」
 (星野郁美訳、鹿島出版会、1968年)
 (8) ドクシアデス「新しい都市の未来像」 (磯村英一訳、鹿島出版会、1966年)
 (9) ウィリアム・H・ホワイト他「爆発するメトロポリス」
 (小島将志訳、鹿島出版会、1973年)
 (10) H・カーヴァー「郊外都市論」 (志水英樹訳、鹿島出版会、1969年)
 (11) E・ハワード「明日の田園都市」 (長素連訳、鹿島出版会、1989年)

5. ル・コルビジェとルイス・マンフォード

- (1) ル・コルビジェ「建築をめざして」 (吉阪隆直訳、鹿島出版会、1991年)
 (2) // 「アテネ憲章」 (// 、 // 、1985年)
 (3) // 「エスプリ・ヌーボー」 (山口知之訳、 // 、1980年)
 (4) // 「ユルバニスム」 (樋口清訳、 // 、1974年)
 (5) // 「今日の装飾芸術」 (前川国男訳、 // 、1974年)
 (6) // 「輝く都市」 (坂倉準三訳、 // 、1991年)
 (7) ル・コルビジェ、F・ド・ピエールフウ「人間の家」
 (西澤信弥訳、 // 、1978年)

- (8) チャールズ・C. ジェンクス「ル・コルビジェ」
(佐々木宏訳、鹿島出版会、1978年)
- (9) ノーマ・エバンソン「ル・コルビジェの構想」
(酒井孝博訳、井上書院、1984年)
- (10) ルイス・マンフォード「ユートピアの系譜」 (関裕三郎訳、新楽社、1974年)
- (11) " " 「都市の文化」 (生田勉訳、鹿島出版会、1981年)
- (12) " " 「歴史の都市明日の都市」 (生田勉訳、新潮社、1979年)
- (13) " " 「都市と人間」 (生田勉・横山正訳、思索社、1981年)
- (14) " " 「技術と文明」 (生田勉訳、美術出版社、1982年)
- (15) " " 「現代都市の展望」 (中村純男、鹿島出版会、1973年)
- (16) " " 「芸術と技術」 (生田勉訳、岩波新書、1954年)
- (17) 木原武一「ルイス・マンフォード」 (鹿島出版会、1984年)

6. 都市論全般

- (1) パトリック・ゲデス「進化する都市」 (西村一朗訳、鹿島出版会、1982年)
- (2) アンリ・ルフェーブル「都市革命」 (今井成美訳、晶文社、1974年)
- (3) マックス・ウェーバー「都市の類型学」 (世良晃志郎訳、創文社、1977年)
- (4) " " 「都市」 (倉沢建訳、中央公論社、1975年)
- (5) レオナルド・ヴェネーボロ「近代都市計画の起源」
(横山正訳、鹿島出版会、1991年)
- (6) カミロ・ジッテ「広場の造形」 (大石敏雄訳、鹿島出版会、1991年)
- (7) ウォルフガング・ブラウンフェルス「西洋の都市・その歴史と類型」
(日高健一郎訳、丸善株式会社、1986年)
- (8) シビル・モホリーナギ「都市と人間の歴史」
(服部岑生訳、鹿島出版会、1975年)
- (9) ルードヴィヒ・ヒルベルザイマー「都市の本質」
(渡辺明次訳、彰口社、1973年)
- (10) E・A・ガトキンド「都市」
(日笠端監訳・渡辺俊一・森戸哲訳、日本評価社、1966年)

- (11) ジークフリート・ギーディオソ「空間・時間・建築」(I・II)
(太田寛訳、丸善株式会社、1965年)
- (12) ケビン・リンチ「時間の中の都市」
(東京大学大谷研究室訳、鹿島研究所出版会、1974年)
- (13) F・レンツ・ローマイツ「都市のふるさと」
(武基雄・伊藤哲夫訳、鹿島出版会、1978年)
- (14) ポール・ズッカー「都市と広場」
(大石敏雄監修・加藤是規・三浦金作訳、鹿島出版会、1975年)
- (15) アーサー・コーン「都市形成の歴史」(星野芳久訳、鹿島出版会、1982年)
- (16) ジェリフ&スーザン・ジェリコー「景観の世界～人類による環境形成の歴史～」
(山田学訳、彰口社、1980年)
- (17) ジョン・ゴス「ブラウンとホーヘンベルフのヨーロッパ都市地図～16世紀の世界」
(小林阜夫監訳、同期舎出版、1992年)
- (18) レオナルド・ヴェネーボロ「図説 都市の世界史」(1、2、3、4)
(佐野敬彦・林寛治訳、相模書房、1983年)
- (19) エンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」(上・下)
(一條和生・杉山忠平訳、岩波文庫、1990年)
- (20) ジェーン・ジェイコブス「都市の原理」
(中江利忠・加賀谷洋一訳、鹿島出版会、1971年)
- (21) " " 「アメリカ大都市の死と生」
(黒川紀章訳、鹿島出版会、1988年)
- (22) " " 「都市の経済学」
(中村達也・谷口好訳、TBSブリタニカ、1986年)
- (23) ロバータ・B・グラッツ「都市再生」
(富田鞠彦・宮路真知子訳・林泰義監訳、晶文社、1989年)
- (24) メルシェ「十八世紀パリ生活誌」(上・下)(原宏編訳、岩波文庫、1989年)
- (25) クリストファー・ヒバート「歴史の都の物語」(上・下)
(芦原初子・渡辺真弓訳、原書房、1992年)
- (26) S・F・ラスムッセン「都市と建築」(横山正訳、東大出版会、1993年)

- (27) S・F・ラスムッセン「近代ロンドン物語」
(兼田啓一訳、中央公論美術出版、1992年)
- (28) F・ブローデル「ヴェネツィア～歴史紀行」 (岩崎力訳、岩波書店、1986年)
- (29) ジョナサン・ラバン「住むための都市」 (高島平吾訳、晶文社、1991年)
- (30) ルドフスキー「人間のための街路」
(平良敬一・岡野一字訳、鹿島出版会、1973年)
- (31) 増田四郎「ヨーロッパの都市と生活」 (筑摩叢書、1983年)
- (32) 〃 「都市」 (〃 、1981年)
- (33) 〃 「ヨーロッパとは何か」 (岩波書店、1985年)
- (34) 〃 「西欧市民意識の形成」 (講談社学術文庫、1995年)
- (35) 鯖田豊之「都市はいかにつくられたか」 (朝日新聞社、1988年)
- (36) 羽仁五郎「都市の論理」 (第1部、第2部) (講談社文庫、1982年)
- (37) 比較都市史研究会編「比較都市史の旅～時間・空間・生活～」
(原書房、1993年)
- (38) 木村尚三郎「西欧文明の原像」 (講談社学術文庫、1990年)
- (39) 〃 「ヨーロッパとの対話」 (角川文庫、1983年)
- (40) 〃 「成熟の時代～十八世紀の西欧と現代～」
(日本経済新聞社、1982年)
- (41) 〃 「耕す文化の時代」 (ダイヤモンド社、1988年)
- (42) 〃 「ヨーロッパからの発想」 (角川文庫、1983年)
- (43) 川添登「都市と文明」 (雪華社、1970年)
- (44) 〃 「裏側からみた都市」 (NHKブックス、1982年)
- (45) 川添登編「都市と人間」 (日本生産性本部、1967年)
- (46) 芦原義信「隠れた秩序」 (中央公論社、1986年)
- (47) 〃 「街並みの美学」 (岩波書店、1980年)
- (48) 〃 「続 〃 」 (岩波書店、1983年)
- (49) 〃 「東京の美学」 (岩波書店、1994年)
- (50) 〃 「外部空間の設計」 (彰国社、1978年)
- (51) 磯崎新「いま、みえない都市」 (大和書店、1985年)
- (52) 長谷川堯「生きものの建築学」 (平凡社、1981年)

- (53)長谷川堯「建築旅愁」 (中公新書、1979年)
- (54) 〃 「建築有情」 (〃 、1983年)
- (55) 〃 「都市廻廊」 (中公文庫、1985年)
- (56)東秀紀「漱石の倫敦・ハウードのロンドン」 (中公新書、1991年)
- (57) 〃 「荷風とル・コルビジェのパリ」 (新潮選書、1998年)
- (58)陣内秀信「ヴェネツィア」 (鹿島出版会、1991年)
- (59) 〃 「ベネチア・都市のコンテクストを読む」 (〃 、1986年)
- (60) 〃 「ベネチア～水上の迷宮都市～」 (講談社、1992年)
- (61) 〃 「都市を読むイタリア」 (法政大学出版局、1988年)
- (62)清水徹也「都市の解剖学」 (ポーラ文化研究所、1981年)
- (63)村松貞次郎編「近代建築史概説」 (彰口社、1984年)
- (64)宝木範義「パリ物語」 (新潮選書、1984年)
- (65)下村純一「不思議な建築」 (講談社現代新書、1986年)
- (66)小林博「ヨーロッパ都市の近代的変容」 (大明堂、1996年)
- (67)今井登志喜「都市発達史研究」 (東大出版、1956年)
- (68)弓家七郎「都市政策」 (廣文社、1951年)
- (69)神谷国弘「都市比較の社会学」 (世界思想社、1983年)
- (70)塩野七生「コンスタンチノーブルの陥落」 (新潮社、1983年)
- (71) 〃 「海の都の物語」 (中央公論、1980年)
- (72)井上泰男「西欧社会と市民の起源」 (近藤出版社、1970年)
- (73) 〃 「西欧文化の条件」 (講談社現代新書、1979年)
- (74)西山康男「アンウィンの住宅地計画を読む」 (彰口社、1992年)
- (75)奥井復太郎「現代大都市論」 (有斐閣、1941年)
- (76)杉本俊多「ベルリン～都市は進化する～」 (講談社現代新書、1993年)
- (77)内田芳明「風景と都市の美学」 (朝日新聞社、1987年)
- (78) 〃 「風景の現象学」 (中公新書、1985年)
- (79)大久保昌一「有機的都市論」 (都市文化社、1989年)
- (80)梅棹忠雄・守屋毅編「都市化の文明学」 (中央公論社、1985年)
- (81)佐々木雅幸「創造都市の経済学」 (勁草書房、1997年)
- (82)饗庭孝男・陣内秀信・山口昌男「ヴェネツィア」 (東京書籍、1993年)

- (83) 比較都市史研究会編「比較都市史の旅」 (原書房、1993年)
- (84) 本城晴久「十八世紀パリの明暗」 (新潮社、1985年)
- (85) 森田廣一「西洋建築史概説」 (彰口社、1984年)
- (86) 藤森照信「明治の東京計画」 (岩波書店、1982年)
- (87) // 「都市建築」 (// 、1990年)
- (88) 正井泰夫「都市地図の旅」 (原書房、1986年)
- (89) 総合研究開発機構編「都市美創出のためのデザインコントロール手法」
(NIRA、1984年)
- (90) 小池滋「ロンドン～ほんの百年前の物語～」 (中公新書、1978年)
- (91) // 「もうひとつのイギリス史～野と町の物語」 (// 、1993年)
- (92) 鈴木博之「ロンドン～地主と都市デザイン」 (ちくま新書、1996年)
- (93) 角山栄・川北稔編「路地裏の大英帝国～イギリス都市生活史～」
(平凡社、1982年)
- (94) 梅棹忠夫・上田篤編「柔らかい新都市」 (講談社、1984年)
- (95) 高橋伸夫「フランスの都市」 (二宮書店、1981年)
- (96) 岡秀隆「ヨーロッパのアメニティ都市」 (新建築社、1991年)
- (97) // 「都市の全体像～隔離論的考察～」 (鹿島出版会、1986年)
- (98) 矢作弘・大野輝之「日本の都市は救えるか～アメリカの成長管理に学ぶ～」
(開文社出版、1990年)
- (99) G・C・アルガン「ボッロミーニ」 (長谷川正允訳、鹿島出版会、1992年)
- (100) フランツ・ヴィンツィンガー「デューラー」 (永井繁樹、グラフ社、1985年)
- (101) 隅研吾「新・建築入門～思想と歴史～」 (ちくま新書、1994年)
- (102) 共同通信社編「変わる都市」 (共同通信社、1989年)
- (103) 石川英耀「皇国都市の建設～大都市疎散問題～」 (常磐書房、1944年)
- (104) 紙野桂人「人間都市論」 (学芸出版社、1990年)
- (105) 越沢明「東京の都市計画」 (岩波書店、1991年)
- (106) 矢島釣次「1666年ロンドン大火と再建」 (同文館、1994年)
- (107) 小林盛太「建築美を科学する」 (彰口社、1995年)
- (108) 尾島俊雄「安心できる都市」 (早稲田大学出版部、1996年)
- (109) // 「絵になる都市づくり」 (NHKブックス、1984年)

- (110) 黒川紀章「共生の思想」 (徳間書店、1987年)
- (111) 〃 「都市デザイン」 (紀伊国屋書店、1978年)
- (112) 若山滋「都市へ向かう旅」 (冬樹社、1985年)
- (113) 高階秀爾・芳賀徹編「世界都市の条件」 (筑摩書店、1992年)
- (114) 土井淑平「都市論～その文明史的考察～」 (三一書房、1997年)
- (115) 宮崎辰雄「市民都市論」 (日本文芸社、1971年)
- (116) 田村明「都市の個性とは何か」 (岩波書店、1987年)
- (117) 〃 「まちづくりの発想」 (岩波新書、1990年)
- (118) 〃 「環境計画論」 (鹿島出版会、1991年)
- (119) 小倉欣一・大沢武男「都市フランクフルトの歴史～カール大帝1200年～」
(中公新書、1994年)
- (120) 宇田英男「誰がパリをつくったか」 (朝日選書、1994年)
- (121) 関一「都市政策の理論と実際」 (三省堂、1963年)
- (122) 山崎正和編「都市開幕」 (T. B. Sブリタニカ、1988年)
- (123) 内務省地方局有志「田園都市と日本人」 (講談社学術文庫、1980年)
- (124) 西川幸治「都市の思想」 (NHKブックス、1978年)
- (125) 本間義人「国土計画の思想」 (日本経済評論社、1992年)
- (126) 〃 「土木国家の思想」 (〃 、1996年)
- (127) 石田頼房「日本近代都市計画の百年」 (自治体研究社、1992年)
- (128) 出口保夫「ロンドン・ブリッジ～聖なる橋の2000年」
(朝日イブニングニュース社、1984年)
- (129) 吉田民雄「揺らぎの都市～危機と創造のシティ・ダイナミックス～」
(ぎょうせい、1989年)
- (130) 宮本憲一「都市をどう生きるか～アメニティの招待～」 (小学館、1984年)
- (131) 〃 「都市経済論」 (筑摩書房、1981年)
- (132) W・H・ホワイト「City～都市という劇場～」
(柿本照夫訳、日本経済新聞社、1994年)
- (133) 矢作弘「都市はよみがえるか」 (岩波書店、1997年)

7. その他

- (1) E. F. シューマッハー「スモール・イズ・ビューティフル」
(小島廣三・酒井懋訳、講談社学術文庫、1986年)
- (2) デカルト「哲学原理」
(桂寿一訳、岩波文庫、1981年)
- (3) コリン・ノーマン「技術文明論」
(青山貞一・池田こみち訳、学陽書店、1982年)
- (4) シュライバー「道の文化史」
(関楠生訳、岩波書店、1962年)
- (5) 米山俊直「小盆地宇宙と日本文化」
(岩波書店、1990年)
- (6) 山田太一「岸辺のアルバム」
(角川文庫、1995年)
- (7) 今井弘道編著「市民の時代」
(北海道大学図書刊行会、1998年)
- (8) 佐伯啓思「市民とは誰か～戦後民主主義を問い直す～」(PHP新書、1997年)
- (9) 平田清明「市民社会と社会主義」
(岩波書店、1969年)
- (10) 荒井政治・内田星美・鳥羽欽一郎「産業革命の技術」
(有斐閣、1981年)
- (11) ローテンバッハ「死都ブリュージュ」
(窪田殷彌訳、岩波文庫、1990年)
- (12) 幸田露伴「一国の首都」
(岩波文庫、1993年)
- (13) 石井幹子「都市照明のデザイン」
(鹿島出版会、1984年)
- (14) 岩城正夫「原始技術論」
(新生出版、1985年)
- (15) 薬師寺泰蔵「テクノヘゲモニー」
(中央公論社、1989年)
- (16) 紅山雪夫「ドイツ」
(読売新聞社、1987年)
- (17) 小野二郎「ウイリアム・モリス」
(中公文庫、1992年)
- (18) マグダ・レヴェツ・アレクサンダー「塔の思想」
(池井望訳、河出書房新社、1992年)
- (19) 池上淳「生活の芸術家～ラスキン、モリスと現代～」
(丸善ライブラリイ、1993年)
- (20) ウイリアム・モリス「民衆の芸術」
(中橋一夫訳、岩波文庫、1993年)
- (21) ダニエル・デフォー「ロンドン・ペストの恐怖」
(小学館、1994年)
- (22) F・カプラ「タオ自然学」
(吉福伸逸・島田裕巳・他訳、工作舎、1979年)
- (23) 三井秀樹「美の構成学」
(中央公論社、1996年)
- (24) 角山栄「時計の社会史」
(中公新書、1984年)
- (25) サン・テクジュペリ「夜間飛行」
(堀口大学訳、新潮文庫、1997年)

- (26) ロラン・バルト「エッフェル塔」
(宗左近・諸田和治訳、ちくま文芸文庫、1997年)
- (27) 倉田保雄「エッフェル塔物語」 (岩波新書、1983年)
- (28) ルソー「社会契約論」 (桑原武夫・前川貞二郎訳、岩波文庫、1994年)
- (29) 〃 「人間不平等起源論」 (本田喜代治・平岡昇訳、岩波書店、1963年)
- (30) 豊田堯「市民革命の時代」 (講談社現代新書、1993年)
- (31) 天野正子「生活者とは誰か～自律的市民像の系譜～」 (中公新書、1996年)